
学園黙示録 -Antithese[アンチテーゼ]-

ウォースパイト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学園黙示録 - Antithese「アンチテーゼ」 -

【Nコード】

N5546X

【作者名】

ウォースパイト

【あらすじ】

転生者となった主人公、如月朔哉が人類終末の世界で奮闘するという物語。神様からの贈り物は一切存在しませんが、とにかく一癖も二癖もある身内に囲まれており、それらの人々に感化されながら主人公は準チート級ぐらいには成長していきます。基本的には原作ルートで進んでいきますが、随所にオリジナル要素も加えていきます。と思っておりますので、よろしく願います。

prologue: Book of the dead (前書き)

始めまして。初心者ですが地道に頑張っていきたいと思っています。

何とぞ、よろしくお願いします。

prologue: Book of the dead

「序」

日はまた沈み、日はまた昇る。

厚く、不透明でいて深い、そんな深淵の闇はたった今降りようとしている。赤紫色を帯びた夕陽は、靄のかかった水平線で海と溶け合っていた。“マジックアワー”は永遠には続かない。夜の帳が下り、次第に漆黒の亀裂が走って、夕陽が腰を据えていた台座を明け渡した。

無秩序でいながらも整然と並ぶ朧雲は無数の層を築き、やがて空に灰色のベールが降ろされた。その下、私立藤美学園に白鋼色の月光が差し込み始めたのは、時に「如月おとづき朔哉さくぎ」が校外に身を乗り出したのと同時刻であった。楽々と扉をよじ登り、なるべく音を立てずに着地する。朔哉にとって、夜間の無断外出などは大した問題ではなかった。明日にはそうしなければ、命1つ落としかねないからだ。使える時間は余す所無く利用する。

（朧月夜の逃避行……）

朔哉はそう静かに胸の内に呟いたが、彼は藤美学園から、床主市から、そして現実から逃げる気はさらさら無かった。むしろ誰よりも早く現実を直視する下準備を済ませる為、行われた一夜が今日である。

そして、朔哉の記憶は18年前程に遡る。

* * * * *

- prologue -
「Book of the dead」

「単刀直入に言おう。お主は 死んだのだ」

と、18歳の多感な青年に唐突な言葉を告げたのは、古代ローマの装束に身を包み、髭を生やしたという奇妙な姿の老人だった。深層心理に深く突き刺さるその言葉だが、青年はそれをあさつての方向に受け流して、顔を顰めながら携帯を取り出した。

「ちょ……、何。信じてないのか？」

「いや、分かるよ。分かってるよ俺。あれだろ……あの……」

と言いつつ、青年はすっ呆けた様子で「110」をプッシュした。

「あれじゃないよ。完全に不審者扱いしてるじゃろうが。俺、そんなに“変”か？」

「当たり前に変だろ。いきなり見ず知らずのジジイに「死んだ」なんて言われたら。ところで、あんた一体何者なんだ？」

「フツフツ……」

老人は不敵な笑みを浮かべる。「俺は“神”じゃ。全知全能の存在であり、全人類の保護者でもある。故にお主の事も見守っておった。今日は、参考本ついでに新刊の漫画を買おうと思っておったんじゃろう？そして猛スピードのトラックに轢かれて意識を失った……と。俺は全て承知じゃ。まあ、それでいえば俺は守護神 とも言うのかのお」

「言い換えればストーカーか」

「断じて違うッ!!」

（何か飽きてきたな）

「こっちは真剣にやっておるのに飽きてきたとはお主!」

「心を読んだ!？」

「ご名答」神は言った。「儂は神なのだ。神は全て承知しておるのだ」

神は咳をした。「では、本題に移ろう。まず、お主がここにいるのは、儂が誤って「死者の書」のお主のページを紛失してしまったからじゃ。そしてどうやらそのページは消滅してしまった、お主はこの世から召されてしまった　という訳なのじゃ!」

「訳なのじゃ、じゃねえ!!」

青年の拳が一閃する。流れるような動作で脇を引き締め、突き出された一撃は神の喉仏にクリーンヒットして、細衰えた身体が宙を舞う。1回転、2回転、3回転……。ぼろ雑巾のように身を擦じらせ、飛ばされていく神は綺麗に顔面から地面に着地して、沈黙した。

「年寄りはおつと大事に扱わんか!」

「すがすがしい程に理不尽だな、オイ!!」

どすつと、神が青年の前に座り込む。

「むしろこれが運命だったと割り切ってくれんか。人間人生50年、いずれは死んでしまう。世の中には、生まれる前に死んでいく命だって星の数ほど存在する。例えば生まれてきたとしても、人生を

全うする前に紛争や事故や病気によつて死んでいく人間も少なくはない。その事を考えれば、18年をのうのうと生きてきただけでも幸せだったと思うことじゃ」

さすがに決まり悪く、青年は渋々頷いた。

「で、これから俺はどうなるんだ？」

不安に染まつた表情を浮かべ、青年は訊いた。

「お主には新しい人生を用意しておる。お主が希望する人生を与えてやるう」

「マジでか!？」

青年は感嘆した。

「俺の希望」

「じゃあ学園黙示録で」

「うおい!!!!!!」

神の発した言葉は、収まつた筈の青年の憎悪の念をぶり返した。

「異論は許さんwwwwwwこれも試練じゃwwwwww」

「笑いつ放しじゃねえか!!明らかに暇潰しが目的だろお前!!」

「まあ聞け。もっとも安全で快適な「日本」という国に生を受け、そこで何不自由なく人生を消費してきたお主はその運を使い果たしてしまつたのだ。人類終末の世界でも生を受けんと、これまでに消費した運の量と割に合わんという訳なのじゃよ。人類終末といつても、隕石衝突後の世界とか、核戦争で終末した世界があることも考えてみよ。それにさっきも言つたが、生きれるだけでも幸せと思

うんじゃ」

と告げる神の顔を、青年は見返した。

「いやいや、明らかに「死亡フラグ」満載の世界じゃねえかよ」
「物は見様。その煩惱だらけの心の中には、卑しい願望もあるではないか」

青年は洪面を浮かべた。「ああ……うん、そうだよなあ。分かったよ」

「心は決まったようじゃな」
「ああ……ぜひ頼むよ。ありがとう」

そう言い切った後、次第に意識は遠のいていった。

prologue: Book of the dead (後書き)

という具合に第1話終了です。拙い文を羅列させていただいて申し訳ありません。

何とか更新を進めていきたいと思っておりますので、今後もしよろしくお願いします。

#1: Sudden death

まるで1tトラックに押し潰されたかのように固く閉ざされていた目蓋が開くと、薬品やリノリウムが入り混じった微かな匂いが、その体を包み込むようにして立ち込める。白亜のその空間はどこまでも広がっているような感覚に陥る程、広く感じられた。そして、まだ穢れなき無垢な瞳の中をビタミンAが駆け巡り、ロドプシンと呼ばれる網膜色素が光の認識を手助けた。光の滝が流れていた視界はやがて冴え、彼を見下ろす1人の男を映し出した。男は感涙に浸っていた。

「朔哉……」

男の名前は「如月修^{きついで かつむ}」、陸上自衛官で祖父、父、子と続く三代続きの生粋の軍人だが、既にその父を亡くしていた。時に数年前のことである。出征から29年間、フィリピンでゲリラ戦に投じてきた祖父、「如月^{きついで} 貫太郎^{かんたろう}」はいまだ健在であった。

如月修は32歳、これといって印象に残りづらい掘りの浅い平面顔で、ごく平凡な顔立ちだ。中肉中背の体つきで、よく刈り上げられた漆黒の髪と情熱に燃える瞳が何よりの特徴だった。

どうやら、この人が俺の転生先での父親らしい。

「あ……あ？」

どう呼んでいいかわからず、とりあえず父親のことをそう呼びか

けてみた。しかしどうやら舌が未発達ならしく、「パパ」と呼ぶ所が「あ……あ」と変換されてしまったらしい。というよりも、いま考えてみたらいくらなんでもその名前を言うのは早すぎか……。

「……朔、朔哉」

と呟いた柔らかい声が俺の耳に入った。声が飛んできた方向に顔を向けると、薄暗い照明に映える淫色の瞳が揺らめいていた。均整のとれた目鼻立ち、口元にはやかに優しさを湛えている。その1人の女性こそ、俺の転生先での母親、「如月^{きさき} 杏奈^{あんな}」その人だった。旧姓は分らない。父親はこの人を杏奈 と呼んでいるだけだから……。

「こ、こつちに……」

母は必死だった。いや、常軌を逸している。愛子を抱きたい気持ちには女性共通だろうが、明らかにその様子はおかしかった。周りを取り囲む医師達の表情からも、その異状さが伝わってくる。

「奥さん。安静に、安静に」

医師の1人が起き上がりとする母を諭す。黒縁眼鏡の似合った、髪の高い中年男だ。職業の象徴であるう白衣を振り乱し、顎を擦ったり額に手の平を置いたりする仕草を見せつつ、父と話を続けている。交わされる会話は口数を増すごとに雲行きを悪くし、2人の表情は明らかに絶望をたたえていた。

「絶望的です。残念ですが……」

淫色の瞳がそれを受け止める。終始沈黙の後、母はやはり赤子で

ある俺の方に手を差し出し、父親に向けてアイサインを送った。

「すまなかったな」

父が母に告げる。肉付きの良い両腕で俺の体を力強く、そして注意深く持ち上げた。俺の体が宙に浮く。ほんのわずかな遊覧飛行を堪能した後、俺の体は母の温かな腕の中へと包み込まれた。

数分程度のことだった。俺はその人の息子とはいえ、実質的には赤の他人なのだ。だが、実の母にも似た、何ともいえぬ温もりと優しさを感じたのは事実だった。そして、そんな時を永遠に過ごしていたい……と思ったのも、紛れも無い事実だったのだ。

でも、それは叶わない事実でもあるのだろう。

* * * * *

- # 1 -

「Sudden death」

6年後。

辺り一面に漂う土埃が、一陣の風を受けて舞い上がった。半ば転がるように、半ば滑るように「如月 朔哉」は軽やかな前転を決め、5 m先に聳え立つ檜の木に一本の円匙^{えんぴ} 剣スコップ、または西日本ではシャベルと呼ばれる が突き刺さった。

高さ3 m、太陽に向かって成長し続けるその檜の木は、声にならない悲鳴を上げた。ざわざわと枝先を鳴らし、新緑を讃える葉の雨

が降り注ぐ。朔哉は満足気な笑みを浮かべ、歯先が鋭利に尖った円匙を強引に引っ抜いた。が、堅牢な櫛の木から一物を抜くのは至難の業である。朔哉は右足を木の根元に寄せ、歯を食い縛りながら円匙を櫛の木から引き抜いた。何とか無事に回収出来たこともあって、朔哉は大声で笑った。

「何がそんなに可笑しいんじゃ？」

とフィリピンからの帰還兵にして朔哉の曾祖父、「如月 貫太郎」が訊く。陸軍中野学校二俣分校卒の情報将校としてフィリピンに赴任。遊撃戦 すなわちジャングルでのゲリラ戦術を指導するのが主な任務内容であった。時に1944年12月、レイテ沖海戦で戦艦『武蔵』を始めとする連合艦隊主力戦力を帝国海軍が喪失し、B-29が本土に魔手を伸ばしている時期のことである。フィリピンの事実上の支配者、ダグラス・マッカーサー将軍が“I shall return” 「私は必ず戻る」という言葉を忠実に実行しようと思論んでいた時期でもある。

1945年8月、如月貫太郎少尉の耳に「日本降伏」の4文字は伝わらなかった。彼は4名の部下とともに戦闘を続行、島内に生息する野生牛や自生する椰子の実等で命を繋ぎ、30名以上の在米軍兵士を死傷させた。

それから29年後の1974年、彼は日本に帰還した。

「いや、投げ技が上手くいったから」

6歳の少年、如月朔哉は微笑を浮かべながら曾祖父に告げた。その右腕には風雨と度重なる使用を経て汚れた、円匙の姿が見えた。スプーン状の幅広の刃の先は砂利によって風化され、まるで刀のように尖っていて、十分な凶器といえる代物であった。何しろ櫛の木

を深く突き刺したのだ。人間の首なら軽く吹っ飛び、頭蓋骨も楽に砕けてしまいかもしれない。

「刀とかバットとかも破壊力はあるけど、円匙もすごいね」

「うむ。『如月流円匙護剣術』は史上最強の剣術じゃて。突く、裂く、殴る、投げる、そして守るといった複数の動作を繰り出すことができ、且つ屋内という制限された環境においても十分に活用出来る。もっとも実戦的な戦闘剣術じゃよ」

円匙は戦争において活躍した兵器の1つだった。戦場において円匙は、自分の命を守る塹壕を掘る道具であり（第二次大戦中、歩兵の仕事の8割は塹壕掘りといわれる程、塹壕は重要であった）、自らの排泄行為のために地面に穴を掘るための道具であり、ときには白兵戦の歳の打突武器でもあった。特に塹壕戦では、トレンチナイフや銃剣を凌駕するほど活躍した武器であった。この為、歩兵個人の携行物として支給され、中には防弾銅板で作られた“防弾円匙”も存在した。

『如月流円匙護剣術』は如月貫太郎が考案した剣術である。フィリピンでのゲリラ戦において九八式円匙 帝国陸軍の防弾仕様スコップ を所有していた貫太郎は、円匙を近接武器として多数の米軍兵士の喉を切り裂いた経験を持つ。そしてそこから円匙が近接格闘武器として優れていると認識するようになった貫太郎は帰国後、如月修宅にこの円匙護剣術 と呼ばれる剣術の道場を開設していた。

朔哉はその円匙護剣術の弟子第2号だった。最初は穴掘りを延々とやらせ、次は人間の頭部を如何に上手く破壊するか、という方法を貫太郎はひ孫に教えた。その穴掘りの成果によって生まれたのがナイフに劣らぬ切れ味の刃であり、筋力と脚力だった。

「朔哉」

その声の主は彼の父、「如月 修」だった。その右隣にはしっかりといていそうな雰囲気醸し出す少年と、白のワンピースに麦わら帽子を被った人形のような少女の姿があった。それは朔哉の兄、「如月 遥輝」と義理の妹の「如月 アリサ」だった。アリサは朔哉より1歳年下だ。

如月遥輝は御年11歳、5歳上の朔哉の兄だ。非常に正義感が強く、リーダーシップに富む。小学校では例のごとく学級委員長を歴任していて、例のごとくいじめっ子に睨まれている。しかし、彼は円匙護剣術の弟子第1号である。元々運動神経に恵まれ、また剣術からの筋力と脚力強化の恩恵もあってか何度も撃退を成功させていた。が、朔哉にいわせてみれば「完璧な奴」ほど早く死ぬのだとか。一方、如月アリサは5歳、朔哉とは1歳違いの義理の妹である。一点の染みも見られない純白の肌と、藍色に輝く瞳が特徴的な少女だった。まるで外国の人形のように、華奢な体、均整のとれた顔をしていた。

そして常に無表情であった。

アリサはハーフである。父親は在日米軍の兵士で、母親はその米軍兵士が所属する基地に程近い街に住んでいる一般女性だった。そのため、アリサは両親の血を各所において受け継いでいる。例えば、茶色がかった髪は母親からの贈り物であり、その特徴的な藍色の瞳はアメリカ人である父親からの贈り物だった。

そんなアリサが如月家に義妹として迎えられることになったのは、不慮の事故が原因である。アリサが生まれてから1年も経たずして母親が交通事故に遭い死亡。父親は1人で育てていく決意を固めていたが、そんな時に会ったのが同じく妻に先立たれていた軍人、如月修であった。彼らは日米合同軍事演習において知り合い、共に「妻」を失ったという皮肉で悲劇的な共通点の下に親しくなった。同じような悲愴感に苛まれていた彼らは共に支え、励まし合った。しかし運命は残酷過ぎた。1年前、アリサの父親は母親同様に交

通事故に遭い、死を迎えた。そこで身内もおらず、未来さえ見えていなかったアリサを不憫に思った修は、義理の娘としてこの「如月家」に迎え入れたのである。

しかし、アリサはあまりにも酷すぎる現実を直視出来ず、人とは距離を取るようになっていた。無表情の理由はまさにそこだった。

「そろそろ行こうか」

と告げる父親の手には手提げ桶と柄杓があった。

「……うん」

どこか哀しげな表情を浮かべ、朔哉は深々と円匙の刃先を地面に突き刺した。

「如月 杏奈」

と刻まれた墓標は床主の地に聳え立っていた。朔哉はその小さな体を小刻みに揺らし、言葉にならない感情を迸らせながら父親の後ろを付き従う。新聞紙に包まれた花束を両手で抱え、静かに母親の墓標の前にそれを置いた。

「杏奈……」

墓標に向けられた目と声に、育児と仕事と苦悩を支えてきた重みと疲れがあった。如月修は再婚せず、男手一つで2人の子供、遥輝と朔哉を育ててきた。無論、曾祖父貫太郎や自身の母親の後ろ盾が

あつたのも確かだったが、それでも陸上自衛官という重き仕事を両立させるのは大変だった。今ではそれも、一等陸佐という階級に見合った重さが伴う。1年前に義の娘として迎え入れたアリサの事を考えると、その重圧は増すばかりであった。

地面に出来た水溜りに、如月修のその姿勢のよい後ろ姿が浮かび上がる。

「君が帰ってきてくれたら、どんなに嬉しいか……」

そんな沸いて出た父の言葉を、朔哉は皮肉としか思えなかった。今から12年も経たない内にはそれが現実のものとなる。そしてそれが現実に起こった際、愛しい人や親しい人が《奴ら》に変わったその時には、「頼むから逝って欲しい」と切に願うことになるのだろう。

運命は理不尽だ。

#2: Kill of be killed - Part:1

「ローマ」カトリック」に流義を通ずその教会堂には、十字架で張り付けにされた男の像が飾つてある。その像は夕陽を受けて鮮紅色に染まり、まるで血塗れのように見えるのは皮肉だった。その1人の男は、数億の迷える子羊達の罪を贖わせるがため、100年とも1000年ともつかない時間の中を痛みに耐え忍ばなくてはならない運命にあるのだ。自らがそう望んでいなくとも、彼の両腕から釘が引き抜かれる機会は永遠に訪れないのである。そう考えると、何事も馬鹿馬鹿しく感じてしまう。

かく言う「如月 朔哉」だが、彼は“神”と実際に会っていた。しかし、本当の神はこの像のような奴ではなかったため、それを考えると毎日毎日信奉している信者達を不憫に思ってしまうのだった。本当の神は、迷える子羊に有無を言わさず「学園黙示録」の世界に放り入れ、この理不尽で不条理な世界の中で来世を全うしろ、というどうしようもないDSなのだ。

隣で父親の唯一の形見である「ロザリオ」を抱え、目を瞑る少女「アリサ」にも、その気持ちは同様だった。ただ、どうやらアリサは神に祈りを捧げているのではなく、天国に居るであろう父親との会話を楽しんでいる様なのだ。少女は1週間に1度のペースでここを来訪している。教会堂のシスターは女神のような微笑みながら、十字架に張り付けられている《彼》は全ての子供たちの父であり、どこに居ても必ず見守ってくれている とアリサに説いた。当のアリサは相も変わらず《彼》の存在になど目もくれないが、朔哉がそのシスターに要らぬ欲望を抱いているのはまた別の話である。

PM17:00、いつものように教会堂を後にした朔哉とアリサは、帰路に着いた。家から1km未満、通学路に位置するので比較

的治安は良い。と言っても、人と打ち解けずじまいで地理にも疎いアリサを1人に出来る筈も無く、朔哉は今日も付いてきていたのである。

如月朔哉10歳、小学4年生の彼はより良い小学校生活を送っていた。幼稚園では「小室 孝^{こむろ たかし}」、「宮本 麗^{みやもと れい}」、「高城 沙耶^{たかぎ さや}」という原作メンバー3名とも親交を深め、友達となった。小学校入学に伴っても、それは続いていた。

朔哉はそんな楽しい生活を送る中で、次第と過去のことを忘れようとしていた。0歳の頃に起こった母親の死が勿論、その原因であった。また、2度目の幼稚園・小学校生活も平和そのもので、数年後に起こり得るであろう事件が嘘のように感じてしまっていたのである。円匙を用いた護剣術や父親仕込みの剣道、護身術の稽古は欠かさなかったので常に危機意識はもっているつもりではいるが、それは暴漢や不良のような《奴ら》とはかけ離れた現実的な存在を相手としている。朔哉が非現実的な存在に対する危機意識を忘れるのは当然といえば当然のことだった。

「ぎゃあああああああ！！！！」

そんな幻想が音を立てて崩れていくのは思ったよりも早かった。

「おい。まさか……」

朔哉がアリサを後ろに着け、脇を引き締めながら悲鳴の先へと足を進める。

そこに広がっていた光景は 木刀を手にした兄、「如月 遥輝」の姿だった。脇腹や喉を押さえ苦しそうにしているその5人の同級生達が、鬼神像のように冷徹で酷悪な表情を浮かべる兄を取り囲むようにして地面に突っ伏して呻いている。

「『ぶらぶらしていても仕方無いから早く帰れ』と言っただけで逆切れして、襲い掛かってくるなんてね。自業自得だよ」

蹲った同級生達を平然として見下ろしていた遥輝は言った。中学1年生から生徒会役員を歴任し、「風紀の鬼」などと陰で言われていそうな兄遥輝は現在、剣道部に所属していた。副主将である。県大会では優勝し、期待のルーキーとして各高校が既に目を付けているという……。

「兄貴！」

唐突に響く弟の声に、遥輝はぎよっとなった。

「朔哉……。分かってくれ、これは正当防衛なんだ」

意識の薄れかかる同級生の姿を見て、朔哉はかぶりを振った。

「分かる。分かるよ。『やるかやられるか』ってことだろ？」

朔哉は視線を落とした。「でもね、これは……」

「……分かるよ」

その言葉は、2人の口からほぼ同時に放たれた。

* * * * *

- # 2 -

:「Kill of be killed - Part : 1」

3年後。

ブンッ、ブンッ、ブンッ！！

規則的な風切り音が、朔哉の意識をゆっくりと浮上させていく。中学校剣道部の顧問、ろくに木刀も握ったことの無いような中年教師の素振りだ。まるでジェットコースターのような感覚だ。最初は小さく、次第に大きく。新入部員の前で良い姿を見せようと躍起になる教師はここで絶頂を迎え、風切り音は異様に大きく感じ取れた。が、それがいけない事を朔哉は知っている。初速から最後まで一定に、風切り音は最低限になっているかどうかが上手い素振りの見極め方だ。汗みずくになった教師の木刀の振りは、その間隔が明らかに空き、風切り音も小さくなっている。重心も崩れていた。太刀筋も悪い。

「と、このようにだな……」

息を喘ぎながら、体裁を保とうとする教師。その大柄な影が夕刻の稽古室に投影され、いかにも気難しげな顔を部員達に向けていた。時折襲ってくる眠気の波を避けながら、朔哉は正座を崩さずに聞いている。

「では、やってみなさい」

その言葉を待っていましたとばかりに、朔哉は立ち上がった。ぼんやりした頭を必死で横に振り、眠気を追い返した。

彼の持つ木刀は他の新入部員とは逸している。それは通称「殺人

木刀」の異名で知られる櫂型木刀　総重量1kgの素振り用木刀だ。その名の通り、舟の櫂オウルのような形状をしていて、人を殺せるだけの威力を秘めている。

微かな椿油の香りが鼻につく。ずしりと1kgの重みが腕の神経を伝わり、脳を介して「指令」を送る。そして振り上げ　下ろす。太刀筋には先行して重量が乗り、重低音を響かせながら弧が描かれた。そして、それは一定だった。幼い頃から自衛官の父から習ってきた剣術は無駄ではなかった、ということである。

朔哉は盤石のリズムを掴んでいた。素振りから放たれるその重低音は一定の音量であり、それは途切れなく続けられていた。

「ほう、大したものだな」

立ち並ぶ新入部員達の一行、その端で稽古に励んでいたらしい少女がこちらを振り向く。空気を打つ鈍い音がその手元に響いていた。速度、姿勢、加重配分、重心、その全てが完璧に制され、一振り一振りに反映されていた。

「えつと……もしかして……」

少女は首を傾げ、朔哉を見据えた。

凜としたその少女、「毒島 冴子」ぶすじま さえこは例えるならば、すみれのような愛らしさにフジの花のような気高さを備えたという、ある種の神秘性を感じる少女であった。他の女子生徒に比べればやや背が高く、腰元まで垂れた髪が非常に印象的だった。光具合や角度によつては、というより錯覚にも近いようだが、本来は漆黒の髪が紫色に映えて見えるのだ。髪的光沢が眼に痛く、胸に痛く、その内中に秘めし神秘深さを芯にして束ねた……。本来の世界には通用しないで

あろう紫色の髪を、朔哉はそうに感じ、解釈した。
また、妖しげに輝く紫色の瞳も印象的なものだった。

「私を知っているのか？」

冴子は問う。腰元ほどにもある紫の髪は、夕風に当って妖しげに靡いていた。

「あ、はい。毒島……冴子さんですよ。」

朔哉が答えると、冴子は優しげに微笑み返した。

「にしても、まさか君のような経験者がいるとは思ってもみなかったよ」

と冴子は髪をかき上げ、朔哉の手に握られた櫛型木刀を見据える。

その時、自分は現実と向き合っていなかったなと、朔哉は痛感していた。《奴ら》がおらず、父と曾祖父、祖母、兄、義妹とこの新たな人生を平和に過ごす……。そんな幻想にも似た世迷言がかかるうじて頭のすみにある。毒島冴子に会ったことはその崩壊を意味したが、同時に新たな願望の再来を意味する。

これ、「フラグ」立ったんじゃない？

「ええ。父は自衛官なものですから、小さい頃からしごかれてきたんですよ」

朔哉は告げる。彼は円匙護剣術も加えてやっているから、スタミナと肉体能力には誰にも負けない自信があつた。だからこそ、「殺人木刀」ともいわれるほどに色んな重みを持った櫓型木刀を簡単に扱えている。

「では、その成果をぜひ手合せして見せて頂きたいな」
「本当ですか。でも……」

と、朔哉は静かに周りを見渡した。剣道部に入部してから第1日目である故、その基本的な練習メニューは切返しや打ち込みといった基礎が占めている。恐らく、これから1週間もその往来が続くだろう。

「手合せは無理なようですが、打ち込みではいかがですか？」

そんな朔哉の提案に、冴子は同意した。

「それでは、打ち込みといこうか」

打ち込みの基本は打突にあるが、そこに適切な姿勢、充実した氣勢、正確な刀法、そして距離の計り方が要求される。ただただ正面に打ち出すのではなく、正しい姿勢と正確な力加減をもって打ち出し、更に相手との間合いを計算に入れておく。打ち込まれる方 すなわち「元立ち」もただ打ち込まれるだけではなく、相手の実力や2人の間の距離を頭に入れ、正しく捌かなければ意味がないのだ。その点、朔哉と冴子は正確で適切な打ち込みを実現していた。

「ヤアーツ!!」

朔哉の持つ木刀が、流れるように冴子の華奢な体に落ちてくる。

「ぐッ!!」

思ったより強かった衝撃に、冴子が鈍い声を漏らす。朔哉の乗せた重量が太刀筋に先行してのしかかり、さほど間を空けずに主衝撃が訪れる。しかし生粋の武人たる冴子は二層からなる衝撃に対して、背を向けることや膝を屈することは許されない。それを行えるのは、危機に対処し終え、稽古が終わったその時のみである。

「ヤアーツ!!」

第2撃目は何事も無かったように捌かれた。流れるように動いた冴子は距離と実力を推し量り、正確でブレの無い打突を完璧に制したのだ。

それから30分間、攻守同一のまま進められた打ち込みは両者交代の時間に移った。元立ちに朔哉が回り、打ち込みに冴子が転じる。

「ではいくぞ。如月君」

「はい。どこからでもどうぞ」

刹那、冴子の木刀が一閃する。“突かれた” というより、“煌めいた”と形容した方がいいその打突は、まさに閃光だった。木刀が振り下ろされ、乾いた音を立てると同時に、周囲の空気が声にならない悲鳴を上げて集散する。まるで真空波のようなその打突は鈍い音を上げ、朔哉の持つ木刀をぶるぶると震わせた。

そして朔哉は何か、その一撃を捌き切った。

「こりゃあ、凄いですね」

まるで痙攣を起こしたように震える両腕を見て、朔哉は言った。

「君の方こそ。あの一撃は本気だったのだが……」

冴子がうーんと困った様子で言う。紫色の瞳の衝撃を、ヴァイオレット濃褐色の瞳が受け止めたのは冴子の実の父親ぐらいだったに違いない。

そんな姿を見て、朔哉の暗き願望が声を産む。

「『井の中の蛙』……というやつだったんじゃないですか。毒島さんは確かに強いですけど、世の中には俺なんかより、もっともつと強い人が居るんですから。力に過信するよりも力を善き方向に磨き、導くことに心血を注いでみてはいかがですか？」

「らしいな」

冴子は微笑みを漏らし、言った。

「ええ、ええ。ぜひそれを胸に高みを目指してください。俺も協力しますよ、毒島さん」

朔哉の言葉に、冴子は頷いた。

「冴子でいいよ。私も君のことを朔哉と呼ぶから」

冴子は言った。「これからよろしく……朔哉」

これ、「フラグ」立ったね。

「……続けましょうか」朔哉は言った。

口の中の達成感を噛み締め、朔哉は無言のまま木刀を構え持った。

達成感はほろ苦い甘味だった。

#2: Kill of be killed - Part: 1 (後書き)

次回は例のごとく “あの事件” です。

#3: Kill of be killed - Part:2

4年前。

濃い赤紫色だった空が、黒一色に染まっていく。PM19:10、いつものように教会堂を後にした「如月 朔哉」と義妹の「アリサ」は陸上自衛隊の「如月 修」陸将補に引き連れられて、床主東警察署に訪れていた。漫画の世界では、警察崩壊を象徴するような廃墟と化していたが、いまだ小学4年生の朔哉は生き生きとして機能する東署の姿を垣間見た。湯沸かし器が唸り、SAT隊員の整合された靴音が廊下に響き渡る。何より違うのは血痕の1つ、血だらけで東署内を跋扈していた《奴ら》の1体も見られない所だろう。まさにここは、凶悪犯罪に恵まれない地方都市の警察署そのものだった。

「ありがとうございました。宮本警部補」

それは運命の歯車が紡いだ、夢のような絵だった。「宮本 麗」の父親、東署公安係長を務める「宮本 ^{みやもと}正^{ただし}」警部補と実父、如月修が言葉を交わすという景色。揺るぎない信念と熱意を持つ2人の父は、自分達のエゴイズムが生み出した脅威から愛する人を助け出そうと試み、力だけでは何も出来ないということを知る。少なくとも、宮本正は7年後にそれを愛娘への悲劇 として、知ることになる。

「いえ、相手も思ったより軽傷でしたし、生活安全課の課長とは交友がありましてね。彼も、正当防衛と初犯だったこと、それに遥輝君の年のことも考慮してくれたようです」

宮本正は笑みを漏らし、言った。

「何と礼を言ったらいいか……」

決まり悪く、如月修はうなじを掻いて言った。

「それほど気になさらず。“次”がないようにして頂ければ十分です」

朗らかな笑みの刻まれた顔に、真摯な黒い瞳を光らせて宮本正は後を去った。苛酷な現実と信条の狭間を垣間見せる、己の尊厳を守るために最後の一線で踏み止まろうとする目。あからさまな職権乱用を犯してしまった己と照らし見て、これは皮肉だな……と如月修は口許を歪めた。

留置場に自分の居場所は無い、と「如月 遥輝」は胸の内に呟いた。事件での正当性も、防衛手段の在り方も、何から何まで間違っている。自分には絶対的正義を働いただけであって、悪党のように牢屋にぶち込まれる覚えはないのだ。と自身の信条を頭の中でぐるぐると回転させ、その正当性を何度も立証していくのだった。

「遥輝」

鉄格子越しに見る父親、如月修の表情は鬼神のようだった。

「父さん……」

遥輝の顔がわずかに父を見る。竦みそつになる足を一步、また一

歩と進めることに不安と恐怖がのしかかってくる。自衛官として、一人の父親としての如月修は厳格そのものだった。そんな鬼のような父が本気で怒ったらどうなるか。牢屋から一刻も早く抜け出そうという覚悟は次第に薄れてきて、じつとしていた方が利口だと内なる悪魔が囁き告げる。そんな弱気は毒のように全身に回り、完全に気圧された遥輝は途中で立ち止まってしまっていた。

「僕は間違っちゃいない。これは、専守防衛は守った上でやったことだ」

後ろに傾いた身を足で踏ん張らせながら、遥輝は言った。

「お前は専守防衛など守ってはおらん。お前は先に宣戦布告をしただけだ」

「な……何を!!」

遥輝が怒りに満ちた声を張り上げる。

「お前なら」如月修は言った。「お前なら逃げ帰れた筈だ。だが、敢えてお前は人気の無い夕方の路地奥に同級生5人を誘い込んで、専守防衛という名の意図的攻撃を仕掛けたに過ぎん。力に溺れたか、遥輝!」

「違う!父さんの言う専守防衛は……」

遥輝は怒鳴り、終始言葉を搜して沈黙した。

「飾りだ。そう、飾りだよ。これでこれまでであった心の靄が何かはつきりしたよ。自衛隊は僕の望むべき将来じゃない。僕は飾りだけで有事の際には何も出来そうにない軍隊になんて、この身を捧げ

ようとはとてもじゃないけど思わないよ」

遥輝は更に続けた。「警察官になるよ、父さん。それが僕の志す道なんだ」

轟然とする如月修の瞳が、息子遥輝の顔を見据える。だが、その瞳は大粒の涙を零していた。

「……行こう」

悔恨を噛み締め、如月修は牢屋の鍵を開けた。

* * * * *

- # 3 -

：「Kill of be killed - Part : 2」

4年後。

手にまで染み込んだ土と椿油の匂いは、朔哉にとっての目覚まし時計のようなものだった。だが、それはやがて焼き魚を焼く匂いと渾然一体となり、鳴り止まぬ腹の警鐘も相まって、口の中でほんのりとした甘味を感じるに至った。あまりにも明瞭過ぎた「4年前の夢」は、まるで神のお告げのようで気味が悪かった。というより、朔哉にとって神は実在する訳なので、「のようだ」と言葉に表すのは語弊かもしれない。

ぼんやりした頭を枕から離す気になれず、目だけを動かして周囲

を探る。い草の匂いがほのかに薰る畳、木目の天井に薄汚れた蛍光灯、いかにも指を突っ込みたくなるような美麗な障子戸、そしてわずかに開け放たれた、質素な柄の襖。業物の掛け縁と藤の花をあしらった生け花が床の間に飾られている。年代物の箆笥がこの部屋唯一の調度品だった。

「うーん……」

布団を押し分け、長座の状態で身をほぐす。肩を重点的に、やがて下半身部へと下る。鈍痛が体の各所を襲ったが、やり終えた後には身もほぐれてすっかり元気になった。

「うん。これでいい」

と朔哉は静かに呟く。立ち上がり、わずかに開いた襖に手を掛けた。

開け放たれた襖の向こう、台所で料理をしていたらしい「毒島冴子」の背中がびくりと振り向く。制服にエプロン姿という格好で、朝陽を差したその姿は神々しい何かを感じさせた。冴子は静かに微笑み、朔哉を見据える。

「ああ。起きたか朔哉」

冴子はタオルで手を拭いつつ、笑みを漏らしながら近付いてきた。

「朝食はもう少しで出来るから、今の内に学校へ行く準備をしておけよ。顔を洗って、歯を磨いて、それからその寝癖もな」

と、冴子は言い、朔哉の頭を優しくに触った。いかにも可愛げなその仕草に、朔哉は恥ずかしながらも反射的に頷いてしまった。

俺、如月朔哉が毒島冴子の家へ厄介になるようになったのは、中学校1年生の夏頃からだった。当初は剣道部の自主練習　という名目で毒島家に転がり込んだ訳だ。実際の所、純粋な剣道の鍛錬が目的なのは確かだった。中学の剣道部では中々やれない「本気」の、それも実戦に限りなく近い模擬試合をやり、打ち込みや素振り、切返しなどの基礎もひたすら続けた。

あえて言えば、鍛錬は自分の家でやっているものと大差無かった。つまり　辛いということだ。辛いことを率先してやりたいと思えるほど、俺も人間が完全に出来た訳ではない。朝から夕方、時には晩まで続く鍛錬は非常に過酷なもので、逃げ出したいと思った時何度かある。

そんな気持ちを決別させてくれたのは、「冴子」の存在と数年後に迫る「Xデー」への危機感だった。よこしまな想いと現実への注視。これこそが、地獄を生き延びる秘訣に違いない。

中学2年生ともなると、今日のように外泊することも多々増えた。やはり剣術稽古という一線は越えられずにいたが、その絆は確実に強くなっていると自負していた。

事実、冴子は俺を信頼して、「あの事件」についても話してくれたのだ。昨日のことだ。

それは普段通りの日曜日だった。如月朔哉と毒島冴子が木刀を手

に取り、朝から夕方まで稽古に励む。しかし、冴子の太刀筋はわず
かだが 迷っていた。

「なあ、朔哉」

抑揚のない冴子の声。それは気の迷いを感じさせるものだった。

「……いや、何でもない」

冴子はためらいがちに首を振る。

「何かあったのか？」

朔哉は問う。

「いや、本当に。本当に何でもないん……だ……」

当惑が答えだった。年に似合わぬ、「力」への当惑。

「何かあったんだな？」

朔哉が苛立ち気味に訊いた。彼は全て承知だった。「あの事件」
だ。

「だから何もないと言っ
」

「冴子……！」

感情の振幅を、首の皮一枚で押し留めた声だった。そして否定の
声でも待つように、そこで一旦言葉を切った朔哉は、変わらず無言

の冴子をちらと見てから、腕を組んだままゆっくりと歩き出した。

「……すまない。私は……、私は……」

瞳に不安を浮かべて、小さく背くのが見えた。

「なあ、君は忘れてるかもしれないが……」

一定の距離を保ちながら、脇から背後へと回った声が続ける。「
中学1年の時の事を覚えてるか。剣道部に入部した初日のことだよ。
俺は君の打ち込みに何とか耐え切り、君は落ち込んだ。自分の実
力の低さに。でも言った筈だが……」

「井の中の蛙」

冴子はピンときたように呟いた。

「そうだ。でも、君は確かに強いんだ。強過ぎるだけなんだ」

朔哉は言い、壁に掛けてあった木刀を2本、手に取った。

「痛み」を。「大海」を知れ、冴子！」

一陣の殺気を帯びて、その言葉は冴子に向けられていた。猛毒を
持つ蛇に睨まれたようで、背中をぶるつと震わせた冴子は静かに振
り向き、宙を舞う1本の木刀を握り取る。二人は向き合い、はつた
と睨み合っていた。

「確かに。私は……痛みを知るべきかもしれない」

静かに応じると、冴子は木刀を持った右手をゆつくりと上げた。
「だが、それは私を圧倒し、私を決断させるだけの力を見せてくれたらの話だ、朔哉！」

黒塗りの木刀を高々と上げて、冴子は応えた。『戦い』への喜びからか、それとも心の底に燃え上がる赫怒からか、彼女の口許は綻んでいた。そんな微笑で応えた冴子の漆黒の瞳に微かな紫みが差しているのが見え、自分が誰と今、向き合っているのか、あらためて思い知らされた気がした。

「それを見せたら、君は自分から話してくれるんだな？」

ようやく合わせた視線を逃さず、朔哉は言ってみた。が返事はなく、そこにあるのは二人が作り出す「見えない壁」だけで、「あの事件」での冴子の心境を計り得られずにいる朔哉の不信感と、『戦い』に身を置ける という冴子の充足感が空間に浮き立つばかりだった。

「ああ。後でな」

微笑を湛え、冴子は 奔った。

#4: Kill of be killed - Part:3

紫色の閃光が目前を擦過し、身体が左に弾かれる。そして 再び一閃。気概の隙間から侵入し、突き出された木刀の刃に収縮した筋肉は、「如月 朔哉」をたじろかせる。小さく呻いた後、腰を思いつきり踏ん張って、何とか畏れを拭いさった。

「どうした、その程度か？」

木刀を構え、「毒島 冴子」は問う。高揚に満ちた瞳で朔哉の顔を見据え、凜として 問うのだ。彼女は体勢を整えつつ、後退する。窓の隙間から入り込んできた夕風に漆黒の艶髪がふわりと靡いたかと思うと、彼女の体は宙を舞い、無垢板に甲高い悲鳴を上げさせながら着地、瞬発的に朔哉との間合いを詰めてしまった。風を身に纏ったまま、突き出された一撃はその華奢な腕からは考えられない程に、猛々しかった。

「くっ……!!」

怯えた声が思わず漏れる。覇気に怖気ていてどうする、俺。そんな、自問自答する言葉が不意に頭の中を過った。と、同時に、これだけの大胆な技を繰り出しては隙が多いに違いないという、希望を滲ませた推測が浮かび上がった。

押しどころを得た突き。大胆でいて繊細だがモーションが大きい。朔哉は息を飲み込む音を眼前に聞きながら、左手をやや左前にそして手は低い位置を保って 出し、右手の握りを緩めつつ左足を左斜めに踏み込み、相手の太刀と体に接触しないよう素早く身を

捻る。紙一重の距離で接敵する冴子の表情には、当惑の色が隠し切れなかった。朔哉はすかさず左拳を高く頭上に掲げて右手を緩め、剣先を右下にして旋回しながら、それでも攻勢の構えを崩さない冴子の突きを表鎧で受け流した。

「なっ……!!」

冴子は驚く。いつの間にか自身の攻撃がかわされ、なんと目の前に相手の太刀があつたのだ。重厚で、それでいて温かみを持った木目が視界に覆い被さっている。武道場内はこれほどまでないというぐらいの静寂に支配され、敗北を　少なくとも同年代の相手に対して　知らない少女のか細い体は震えていて、それが手に持つ木刀にまで伝わってくるのを、朔哉は感じた。

「……どうやら、私の負けのようだ」

毒島冴子は　結果を認めた。

* * * * *

- # 4 -

:「Kill of be killed - Part : 3」

床に落ちた木刀が乾いた音を立てると同時に、よろけた少女の体が前に崩れ落ちる。それまで木刀を振りかざし、頑として彼女の顔を見据えていた朔哉は木刀を投げ捨て、慌てて支えに入った。流れるように宙を舞う彼女の華奢な手首を掴み、はたとその胸にたくり寄せる。見えない糸で繋がれた人形のごとく、朔哉に抱き寄せられ

た冴子は、哀しげな目で朔哉の顔を見上げた。

そんなか弱い冴子の姿を見た朔哉は、なんとも気恥しくなつて一瞬、身を退くようにして視線を逸らした。古武道、稽古とそれまで「力」の追求をおし進め、生き活きと己が人生を全うする彼女の姿しか見た事がなかったからだ。ギャップがあり過ぎる。まるでピロイドのように滑らかな肌が密着していても、それがあまりにも現実離れた光景のような気がして、何の高揚もない。それまで寝食を共にしてきた朔哉としては、毒島冴子という少女には、常に気高くあつてほしかったのだ。

「冴子……」

朔哉は言葉を切った。後の成り行き　すなわち、今後の進むべき人生の道筋は、冴子自身が決めなければならない。朔哉はあくまでもその道標に過ぎず、それを生かすも殺すも冴子次第なのだ。

「約束は守る。守るよ……」

よろけた冴子の体が朔哉を離れる。抑揚のない目がもう一度、こちらを見た。

それから、冴子は静かに語り始めた。昨日の晩、夜道で男に襲われた事。その時、木刀を携えていた事。そして、その木刀で男の肩甲骨と大腿骨を叩き割つてやった事を……。そして、事情を知った警察は冴子をそのまま家に帰してくれたという。

「いや、確かに過剰防衛かもしれないが君が責任を負うことは……」

と、朔哉は言ったが、冴子はかぶりを振った。

「私を縛ってるのは、そのこと自体ではない」

一間の沈黙。不安と恐怖、そして一縷の悲愴を匂わせるような表情を浮かべている冴子は、大きく目を見開いた。

「……楽しかったのだ」

何ともいえない奇妙な切実さを宿した言葉だった。漆黒の瞳の後ろには、夕陽が散らした黄昏色の背景があり、冴子のすっと伸びた影が武道場の壁に立っている。薄紅色のその影に、かつてアニメやらイラストやらで見かけた血まみれ 返り血を浴びた の姿を思い出した。今の彼女はまさに、その薄紅色の影こそが真の姿なのだ。

「……明確な敵を得られたこと。それは悦楽そのものだった！その夜、木刀を手にした自分が圧倒的な優位に立っていると知ったあとは、怯えたふりをして男の動きを誘い……躊躇う事なく逆襲した！」

冴子は俯き、微笑を顔に湛えて続けた。

「楽しかった。本当に楽しくてたまらなかった……」

低く笑う冴子だが、その体は予想もしなかった悦楽とそれを良しとしない常識の狭間で、大きく揺れ動いていた。

「さあ……分かったな。これが真実の私、毒島冴子の本質なのだよ」

「それだけの事が分かったわりには、冷静なんだな」

朔哉は腕を組み、今にも崩れ落ちそうな冴子を見据えて言った。

「何……？」

「本質と向き合ったんだろ？大抵の人間は、自分の本質を見たら発狂して言葉も交わせなくなるさ。その点、君は冷静だ」

毒島冴子だけではなく、そこへ至る道はこの世界に住む全ての人間にとって、もう始まっている。あと4年も経たずして、全ての人間は人間の本質を理解し、狂った世界で生きて行かなくてはならなくなるのだ。恐らく、大半の人間は人生を逃避するか、それに吞まれて我を見失うだろう。その点、毒島冴子は本質を理解し、それをコントロールするまともな人間であると、朔哉は確信していた。

「人の骨を叩き割ったんだぞ。そのどこが冷静なんだ」

冴子は渋面を浮かべて言った。

「それは仕方無いのは承知している筈だ。それについては正当防衛ということで結論が着く。それに、君は冷静だったからこそ、その男を死に至らしめることはなかった。本来の君の力なら、頭蓋骨の一つや二つ、簡単に叩き割れただろう？」

「だが……女子中学生が木刀で中年の男を返り討ちにしたというのは……」

朔哉は溜息をついた。

「じゃあ言うけど、実は俺の兄貴も中2の時、人を木刀でメタメ

タにしたことがあるんだ」

「それは……あの如月先輩の事か？」

朔哉の兄たる「如月 遥輝」は剣道の県大会で歴代の優勝者であり、冴子の憧れとする存在でもあった。朔哉や冴子の所属する剣道部の過去の主将でもあり、その表彰状や武勇伝は彼等の代まで語り継がれていた。

「そう。兄貴は5人のクラスメイト相手に、1人で全員を倒した。それで兄貴は親父の手で警察署まで行かされて、留置場に入れられてたんだが……警察側の配慮で、正当防衛としてお咎めなく帰されたんだよ」

朔哉はそう言い、さらに続けた。「まあ、親父が言うには兄貴はそのクラスメイトを故意に誘い出して、確信犯的に撃退したらしい」

「そうだったのか……あの如月先輩が……」

朔哉は頷いた。「それで分かったことが一つあるんだ。人間は、固有の信念さえ持っていれば、多少それが言動に反映されるって。でも兄貴は正義の信念の名の下にやったことだって言ってるし、実際、そのクラスメイトは教師の間でも手が付けられないので有名だったらしい。だからって、正しいかっていえば正しくないし、間違っているかと言われると一概に間違っているとはいえない。つまり、俺が言いたいのは、自分の信念の成すままにやるのが、自分にとって一番ってことなんだよ」

「だが、それは同時に自己中心的ではないか」

「じゃあ昨日、君はそのままその男に襲われてて良かったんだな？」

「……」
冴子は大きく首を振った。「そうは言っていない。言っていないが……」

「……この話はこれで終わりにしよう」

と、朔哉は言った。「結論をそう急ぐことはないさ。生きてれば生きてる分だけ、色んなことを経験出来るし。それに、また冴子はそのことに悩んだら、俺がまた、この胸をドーンと貸してやるからさ」

突如、先程の切れかけた意識の中での記憶が蘇り、冴子は頬を紅潮させた。そして赤みが頬を走ると同時に、腹の底から押し込まれていた笑いがどっと押し上げてきた。冴子はそれまで見せていた、哀しみの入り混じったものとは比べ物にならない程、充実した笑みを表情に湛えた。

「君は……面白い男だ」

ふと、それまで頭の中を回転していた昨夜の映像とは全く別のものが冴子の胸に差し込んだ。如月朔哉。自分とその本質の前に立ち塞がり、双方を見据えた目は、少しの厳しさと温かみをもっている。昨夜の夜道のような、全てに見放された闇の中で、唯一自分に向けてられたその瞳は、月光のように金色に輝き、自分を照らしてくれていた。

「疲れたろ。少し休んだらどうだ？」

朔哉は言い、疲労の溜った足腰を支え直した。

「……分かったよ。朔哉」

冴子の穏やかな声は、武道場の中で静かにこだました。

#5: Spring of the dead - Part: 1

現実崩壊の2時間前、床主市の私立藤美学園は平和だった。暖かい陽日と、うらかな空氣が毛布のように床主の町を覆い、学園の鐘がゆつくりと規則正しく鳴り響いて、生徒達に授業の時間を告げていた。しかし、「如月 朔哉」には、その鐘の音が一種のカウンタダウンのように聞こえた。不吉な未来を告げる、まるで地獄の底から沸き立ってきたかのような重低音。

そんな中、とある校舎の裏手には灰色の細い煙柱が、まるで竜巻のように渦を巻きながら聳えていた。そこに至る桜並木の道はすぐに細く狭まって、コンクリートの覆い被さる側溝に変わった。大氣が一層淀んで、肺に絡みつくような粘つきを孕んでくる。頭上を覆い尽くした入道雲の天蓋に、ときおり切れ目が生じて、南西の蒼穹からもくもくと流れ込んでくる積乱雲が見えた。

「あー……暇だ……」

二重三重に雲が重なって出来た自然の天蓋を、藤美学園2年の今村は見上げていた。左手に火の付いた煙草、右手に使い捨てライターを握る彼は、自分が不良以外の何者でもないことをよく自覚していた。無論、それで自分が女子や教師達に煙たがれている。もっというえば、嫌われている。事ぐらい良く知っている。それがどうしたと思うし、体の何処かが痛む訳でもない。

ブリーチで染められた茶髪のロングと、それに反する漆黒の瞳は、教師の目を引く。制服にニコチンの匂いを染み付かせていればなおさらだ。その顔と匂いで認識されることもしばしばで、大半の教師は半ばこの不良生徒への生活・進路指導を断念して、最近では見逃

されることも多い。私立高である以上、学業はビジネスであり、生徒育成は一種の投資なのだ。そんな学園にしてみれば、落ちこぼれの今村を怒鳴るその時間を、学業優秀な生徒に費やした方が有意義なのだろう。

それにしても暇だ、と彼は再度呟いた。今日は誰もここを訪れていない。幅の狭い校舎裏だから人数が多いと困るのは困るが、話し相手も居ないので淡々と平凡な1日を消費するしか他にない。故に、今村は何かスリリングな、非日常的な事象を望んでしまう。火事とか、暴力事件とか……とにかく、この平凡な日々を粉々にぶち壊してしまう何かを。

突然、左手に微かな足音が響いてきた。

「ちッ……」

今村は慌てて煙草の先を側溝蓋に押し付け、鎮火する。それを側溝の穴に投げ込もうとした所で、足音の主の微かな動きを、今村は捉えた。

今村の予想に反して、足音の主の正体は 学生だった。それも、先輩に当たる3年。肩に黒のボストンバック、背中には紺色の竹刀袋を掛け、右手に大きなシヨベル 円匙 を携えている。その3年生の怪訝そうな顔が、こちらを見下ろしている。

「あー……確か……どっかで見たんすけど……」

今村は困惑の顔を浮かべながら言った。その3年が誰だったか、必死で思い出そうとしていた。風紀委員やら生徒会委員など、場合によっては非常に厄介な人物かもしれないからだ。そういった、学園に媚び諂うような奴だったら、それまでの一部始終を通告されてしまう恐れもある。

「……如月朔哉。3年で、剣道部の副主将だ」

今村は信じられないという顔で朔哉を凝視した。運動系の部活、それも全国大会の優勝経験を多数持つ名門剣道部の副主将ともなれば、正義感も強い筈だ。教師にチクられる可能性が高い。

「あつ、いや、すみません。そうでしたね、そうでした」

そう言いながら、今村は証拠となる煙草を右手の平に隠し入れた。そして、徐々にその手を側溝蓋の穴へとずらしていく。

しかし、朔哉は無関心だった。

「心配するな。チクったりはしない」

突然、今村はビクつとなって背を伸ばした。どうやら、一連の隠ぺい工作は筒抜けだったらしい。だが、それと同時に校則違反に反応が無いことで、考えていたような正義感の強いリーダー気取りの人間ではないことも分かった。

「あ、ああそうだ。どうぞ座ってください。煙草はどうです?」

今村は身振りでコンクリートの冷やかな大地と、煙草と、ライターを勧めた。朔哉は煙草の吸うのに何の抵抗も持たず、箱から1本抜き取ると、火を付けた。

「お前、今村だよな。2年の」

「ええ、そうですけど……俺に何か用でも?」

「いや……」

ふと、朔哉は思い留まり、事の経緯を思い出した。彼は昨晚、密かに学園を抜け出し、学園近くの空き地に埋めてあったボストンバツク。この日の為に用意しておいた掘り返した後、自宅に戻ってさらに一部の“アイテム”を持ち出してきていた。その後、ルートの下見や前夜の町の概況を調べた後、早朝近くはこの学園へと戻ってきている。そして、学園内で使える武器やルートや物語の進行上主要なメンバーを確認し、満を持して「学園黙示録」の発端ともなった校門前に向かおうとしていたのである。だが、今村という思わぬ人物と遭遇してしまったことで、彼は非常に当惑していた。今村が原作において、もっとも始めの被害者になることを朔哉はよく知っていた。作中でも今村はこのような煙草を吹かせ、同じように煙草を吸いに来たクラスメイト、と《奴ら》化したその生徒に勘違いの考えを抱き、やがて両方の出口を塞がれて絶命した。その最期は悲惨で、数十人の《奴ら》に襲われ、肉塊と化したのである。実は、それが朔哉にとって重要な問題だった。作中では物語の世界観を伝える一種の演出に他ならない今村の死だが、これは現実である。もし、物語通りに事が進めば、今村はこの校舎裏で死を迎えることになる。朔哉にとって、「Z-day」が始まった後の人の死は然程重要なことではなかったが、それが始まっていない今、確実に救えるであろう命を救わないという良心の呵責には、耐えられなかった。そして今、行動を起こそうとしている。それは実の母親を襲い、義妹アリサの心の壁を築くことにもなった「死」という恐れからの脱却の行動であり、自己の信念の表れでもあった。

「今村、これから“面白いもの”を観にいかないか？」

朔哉は友好的な口調で言った。

「面白いもの……すか」

今村は煙草を深く吸い込み、火の付いている方の端を睨み付けた。

「うーん……どうでしょうか」

と、今村は即答を控える様子で言った。どうやら、まだ俺の事を疑っているらしい。朔哉はそう推測した。

「具体的には、どんな事なんすかね？」

今村は訊いた。

「そうだなあ……教師関連の事だよ。少なくとも」

「教師……」

今村は訝しげな表情を浮かべた。

「あの……そう、林先生関連の……だな」

朔哉は原作の断片的な記憶を頼りに、今村の弱みとなるであろう部分に付け入った。今村は熟女好きなのだ。如月朔哉にそのままついていけば、教師の元に自分から出向いて、連行されるようなことになり兼ねないと考えていた今村も、見惚れる林先生に関連したことから、赴かざるを得ないと思った。

「ああ。行きますよ、如月先輩。ぜひ、行かせてください」

今村はそう言っただけで、詳しいことはあまり詮索しなかった。それはそれで、朔哉にとっては非常に都合が良い。時間は限られて

いるのだ。とにかくにも、藤美学園での「Z-day」阻止を図った朔哉の蹴起は、1人の乱入者を加えてのスタートとなった。

* * * * *

- # 5 -

:「Spring of the dead-part:1」

「これ……血ですよね」

「血だな」

今村の問いに、朔哉は素気なく答えた。周囲数mは、どこも血だらけだった。2人の立つ足元、校門付近には大量の血溜りと、黒ずみかけた糞便のようなものも落ちている。医学的知識がない2人には到底検討がつかないものだが、それは腸の内層だった。どうやら、大量の血液とともに腸内から流され、排出されたらしい。だが、その謎の物体xよりも2人の興味を惹いたのは、校門前に落とされた2本の指片と、その近くで異臭を放つ教頭であつた者の肉塊だった。全身を滅茶苦茶に食い千切られて、血を滴らせながら地面に横たわっている。手元とおぼしき部位の近くには、紅く染まつたサスマタが転がっていた。

「先輩……これは明らかに……」

今村は言葉を飲み、校門を叩く不審な男を指差した。男は口許に血をびつしりと付け、白目を剥いて朔哉と今村を睨み付けている。そして口からは「アア……ア……ア……」というぐももつた、一種のノイズに似た声が漏れている。

今村は意を決して近寄った。男の顔と身体中にこびり付いた血に、彼の目は吸い寄せられた。

「なんだよこれ……こんなことが……顔中から血が出てますよ、コイツ」

その男は目、鼻、耳、口というありとあらゆる箇所から、多量の血液を流していた。血は黒ずんでいて、少しずつだが凝固を進めている。顔の表面は干物のごとくカサカサになっていて、口腔内はところどころの皮膚が剥けていて、何らかの肉片が奥歯の隙間に引っ掛かっていた。

「顔だけじゃないみたいですね。その……胸からも」

と、今村は男のはだけたYシャツを見て言った。胸元辺りに二点の大きな赤い染みが付いていて、乳首からも出血があったことを物語っている。当の男は威嚇するかのような唸り声を発し、石像のように無表情で青白い顔に血管を浮き上がらせていた。頬と眼球が陥没していて、それが余計に不気味で気持ち悪かった。

「……よし、今村。分かったろ？これで」

「何が分かったって言うんすか!？」

今村は叫んだ。この状況では仕方が無い。非現実すぎて説明の仕様も無ければ、結論に至ることも容易ではない。だが朔哉は、この惨劇の説明を簡潔に済ませ、速やかに校舎内へと続く二足の血の足跡を辿って行かなければならなかった。

「死体……いや、ゾ……。いやいや」

朔哉は言うのも悍ましくなって、口を嚙んだ。“Z”で始まるあの言葉は話せないし、馬鹿馬鹿し過ぎる。

「つまり、あそこで中に入ろうとしてるような奴が二体、校舎の中にも向かってるってことだ。俺はそいつらを止めに行くが……」

「待ってください。つまり、まだ居るんすか？あいつみたいなのが……」

今村は校門を叩く不審者を再度、指差した。

「いる。それも、さらに増えることになる」

「増える？」

朔哉は頷いた。「お前も、映画とかゲームで知ってるよな。あの『ゾ』から始まる奴を。それが今、現実にも起きててだな、手島と林……だった……が校内に入り込んだんだ。ここの生徒の数のことを考えれば、これ以上の被害は増やしたくない」

今村は首を振った。

「俺達に何が出来るとっていうんすか。武器も持ってないのに……」

「いや、持ってる」

朔哉は即答し、背中に掛けていた紺色の竹刀袋を取り外した。袋を閉じていた紐がするりと垂れ、中から一本の突起物が顔を出した。

それは、アイスホッケーのホッケースティックだった。カーボン製、長さは95 96cm程度。先端のブレードには良く研がれた肉切り包丁 牛刀 が黒いガムテープで幾重にも巻かれて固定されており、その刃先には保護のための専用のカバーが付けられていた。そのカバーには「私立藤美学園高等学校・家庭科調理室備品」という文字が。ホッケースティックの柄には、「私立藤美学園高等学校・アイスホッケー同好会」という文字が刻まれていた。

「これを使え。先端に付いてんのは肉をよく切る牛刀だ。思いっきり振れば、《奴ら》の首の一つや二つ、簡単に切断出来る。もちろん、単に頭めがけて突き刺すだけでも十分いけると思う」

「先輩は？」

「もちろん、これだ」

朔哉は右手のショベルを天高く掲げた。それは、かの旧ソ連特殊部隊『スペツナズ』が使用したと目される といっても、真偽の程は定かでは無い 軍用ショベルを改良・発展させたという代物だった。鋼材にはミディアム・カーボン・スチールを使用しており、エッジには鋭い刃が付いている。ただ、その長さが80cm弱と、60cm程度の通常販売品とは長さがやや異なっていた。これはハンドル 握り手 を長いものと取り替えたための差異だった。《奴ら》との距離を一定に保ち、返り血に対処する為である。

「それと木刀だな」

朔哉は竹刀袋を差した。

「二つも……すか？」

「ああ。シヨベルは投げても使えるからな。もし仮に投げ攻撃を繰り出したとして、いちいちそれを抜く余裕がないほどに《奴ら》が増えたら、その時は木刀で対処するんだ」

と、朔哉は胸の鼓動の高まりを感じつつ言った。彼が携えるのは、中学時代から愛用する櫛型木刀。「殺人木刀」の異名で知られるもので、総重量1Kgを誇る。剣道有段者でも使い辛い一品だが、後頭部や首を狙えば確実に昇天させられるだけの力を備えていた。

「今村、煙草をもう1本くれないか」

「あ、はい」

言われるがまま、今村は朔哉に煙草を手渡し、ライターの火を付けた。彼自身もそれに倣い、煙草を口に咥えて火を付ける。たちまち周囲に、煙草の濃厚な匂いが広がっていく。

（これが最後の1本になるんじゃないのか？）

今村は胸の内に呟いた。そう考えると、妙に口が寂しくなる。

「ありがとっ、今村」

朔哉は片手を差し出した。「じゃあ、急ごう」

#6: Spring of the dead - Part:2

『第1師団本部、こちらハンター1。目標《デルタIIブラボー》に進軍中。到着予定時刻は1200（ヒトフタマルマル）だ。オーヴアー』

『了解、ハンター1。このまま作戦を続行せよ。アウト』

UH-1J（コールサイン：ハンター）　コクピットに2名のパイロット、搭乗席に6名の自衛隊員を乗せた陸上自衛隊の多目的ヘリはそれぞれ3機単位で1個編隊を作り、計3個編隊で東京上空を飛行していた。先頭には観測用ヘリOH-6J（コールサイン：ワイルドキャット）が付き、偵察とエスコートを担う。OH-6Jは卵型のフォルムを持つ特殊な機体で、低空飛行等による前線の斥候を得意としていた。故に、パイロットの懐にある自動拳銃以外、武装といえる武装が存在しない。

陸上自衛隊第1師団、第1普通科連隊第2中隊所属の「梅崎 昌良」三等陸尉　少尉　は、渋谷上空から外界の景色を眺めていた。蒼く、幾重もの花雲を散らせるように空は穏やかだった。あくまでも空は　だが、地上はまさに悪夢だった。陸橋を猛スピードで走る電車の、金切り声のような走行音、クラクションや爆発音がぽつんぽつん、と響く首都高速。そして地上で悶え、苦しみながら死んでいく人々の絶叫と慟哭。通りを埋め尽くす車は沈黙を続け、火災と警報音が鳴り止まなかった。

（　　）　　どうして俺は、国民を守る自衛隊を志願したのにこうやって国民が苦しむ姿を見逃していられるんだ？俺の馬鹿野郎！）

梅崎は自分を罵倒した。何故だろう、こうして身近に死ぬ人間達を助けず、生きているかも死んでいるかも分からない政治家達を助けようとは……。そう、彼は何度も何度も胸の内に呟いた。彼がそう思うのは、自衛隊の苦労も知らずに、現場にも顔を出そうとしないう防衛省の背広組や政治家達が嫌いであつたからだつた。そういった連中が自衛隊の予算を決めている訳で、そういった連中が憲法第9条を作つたのである。自衛隊の予算が潤沢にあり、自衛隊の行動を制約する第9条が存在しなければ、と彼は何度も考えては、それが同時に誤つた思想であると反芻するのだつた。

『ワイルドキャット1よりハンター1。偵察終了、上昇^{アップ}する』

OH-6Jの卵型の機体が飛翔する。その行動に地上の人間が気付かない筈もなかつた。それまで低空飛行していたOH-6Jが突然、上昇を始めたのだ。誰もが広場や公園のような広いスペースに着陸し、救助してくれるものと信じていた。しかし、その希望は打ち砕かれつつあつたのだ。地上を掠め飛ぶ軽やかな羽音は、やがて上昇とともに重い羽ばたきの音へと変わった。自分達を助けないのか、と不安げに顔を上げると、「SHIBUYA109」のアルミタイルの壁面の向こう側へ、その迷彩色の機体を羽ばたかせながら消え去つた。

渋谷上空を抜け、市街地の偵察任務を終えたUH-1Jのパイロットは、ひと息ついているところだつた。慣れない市街地での低空飛行に疲れたのだらう。コレクティブピッチ・レバーを握つたパイロットの右手は汗で湿り、ラダー・ペダルを踏み締めるその足元は震えていた。

『^{HQ}第1師団本部よりハンター全機へ達する。目標^{デルタ・ブラボー}において、《タ

「ゲット」の存在が確認された。現在、衛視とSPによる対処策が講じられているとの報告はあったが、長くは持たないだろう。ハンター各機はロメオ^R隊を緊急展開、可及的速やかに優先パッケージの回収を遂行せよ。作戦成功後は所定の計画に基き、1300（ヒトサンマルマル）を目標に行動せよ。《シグナス》が待機している」

『了解、ロメオ^R隊を展開する』

ヘリの隊列が動き、前方に布陣するOH-6Jが急降下を始める。と、自衛隊員達は化学防護用マスクを着用した。このレベルCの簡易防護システムは、外部装置との連動によって空気濾過システムを確立していた。これなら、突然変異のウイルスにも対処出来る筈だった。

同時に、各員は89式5.56mm小銃に手を伸ばす。備え付けられたスコープに目を通した後、所持している弾薬数を確認した。そして再度小銃を点検し、安全装置を外した。この時、UH-1Jの『ハンター』飛行隊は即応戦闘態勢に移行し、前進を進めていた。

『ロメオ01、準備完了！』

第2中隊（コールサイン：ロメオ）第1小隊長の梅崎は無線機越しに報告した。

『ロメオ02、準備完了！』

『ロメオ03、準備完了！』

少し遅れて、ロメオ02と03も報告する。これで計54名の自衛隊員が完全に準備を済ませたことになる。彼らはこれから、歴史上初であろう 完全武装した自衛隊員として、国会議事堂内に突

入することになるのだ。

「総員、発砲は禁止。第1師団本部の許可^{HQ}が出るまで発砲は禁止する」

その小隊長の言葉に、ロメオ01の隊員達は愕然とした。これは反戦的な与野党左翼の政治家達による圧力で、それに総理大臣と現政権が屈してしまった為の弊害だった。実はロメオ隊は、市川基地からやってきたヘリに搭乗する前、第1師団司令部がある練馬駐屯地で大規模なパンデミックを経験していた。結局、それは師団長である「如月 修」陸将の手腕と迅速な対応により、拡大は防がれた。そしてその過程ではもちろん《奴ら》とも遭遇し、その本質を理解したわけだが、だからこそ武器を使えないというのには納得出来なかったのである。これではまるで自殺しろというのと同じではないか、と。

「では、攻撃された場合は？」

分隊支援火器（SAW）を携えるロメオ01の古株、稲森章吾は訊いた。彼は30分程前、建設用の鉄パイプを武器とし、練馬駐屯地で既に2名の《奴ら》を始末していた。

「その場合は正当防衛として発砲が許可される。存分に撃つてくれて構わない……といたいところだが……」

梅崎は弾倉を見据えた。

「弾は少ない。よって、今作戦では3発制限^{スリー・ショット・バースト}点射のみに射撃機能を限定する」

その言葉を聞き、隊員達は89式小銃を手に取った。そしてセクターレバーを回して、スリー・ショット・バーストに合わせた。スリー・ショット・バーストとは、トリガーを引き続けても3発で連射が止まる機能で、射撃途中にトリガーを戻せば、射撃は中断される。M16A2等にも採用されており、他の国でも採用されているが、それには弾薬の節約と命中精度向上といったメリットが理由に挙げられる。連射することによって弾うちや当たると思っている新兵向きのシステムで、投げ道具を使わず、時には頭を撃ち抜いても生きていような《ターゲット》とは相性抜群といえた。

『第1師団本部、こちらロメオ01。これより降下する！』

梅崎は全身を声にして叫ぶと、ロープを伝って降下した。

* * * * *

- # 6 -

:「Spring of the dead: Part - 2」

陸上自衛隊第1師団とは何か、という練馬区民の素朴な質問に、当時新任の師団長だった如月陸将が答えた言葉は『日本の恒久的平和を保ち、恒久的安全も保障する組織』という何ともお伽話的なものだった。その言葉の一文字も守られていないことは、第1師団司令部の兵舎の一角から眺められる光景から察しがつく。自衛隊ということでは練馬駐屯地に避難民が押し寄せ、それによって駐屯地内でも大規模なパンデミックが発生したのだ。現在、それは如月修が立てた『隔離策』と『銃器の開放』によって収束を見せている。しかし、それでも司令部内に未だ《奴ら》が居るのは現実以外の何者でもなかった。

「幕僚監部からの連絡は途絶したままか？」

東京都、及び周辺6県の地図を睨み付けたまま、如月修は第1通信大隊長の「大久保」二等陸佐に訊いた。

「はい、師団長。防衛省内部からの連絡は完全に途絶しています」

「師団長、如何なさいますか？」

と、如月修に問うのは副師団長の「小澤」陸将補だ。この異常事態とはいえ、早急に対応を定めなければ、6000名の第1師団の戦力が無駄に消費されてしまう。何しろ、この東京都市には1000万を超える人間が住んでいるのだ。撤退なり、再編成なりを進めなければ、囲まれてお終いである。

「一旦、海上に避難するのが得策だろう。東京は諦めた方がいい。戦力差が開き過ぎている」

相手は銃火器を持たない生身の人間だが、「死」を恐れない。それに数も圧倒的多数であり、機動性を重視して戦車や重装甲車のような強力な兵器を保有していなかった第1師団では対処出来る筈もなかった。また、米軍もその陸上戦力を東京には殆ど配備していない。よって、空自や米海・空軍による対地攻撃が相手に対してはもつとも強力な攻撃手段だが、これは同時に東京各所に甚大な経済損害を与えてしまう。政治家達にしてみれば、それは避けたいだろう。

「また、海上に避難した後は北海道や九州に逃げる手もあるが、近隣県に撤退する手もある。差し当たっては、港湾設備が充実していて、大規模な飛行施設を有する所が望ましい」

「そのような所が？」

如月修は頷いた。「ああ。一つ心当たりがある」

「ですが、その前に政府要人を避難させねばなりません」

小澤は渋面を浮かべて言った。

「それは早急に解決する」

如月修は言った。

* * * * *

『 全校生徒、職員に連絡します！全校生徒、職員に連絡します！現在、校内で暴力事件が発生中です！生徒は職員の誘導に従って、直ちに避難してください！！繰り返します。校内で暴力事件が発生 』

「如月 朔哉」と「今村」は右足を踏み込んだところで、足を止めた。驚愕に満ちた静寂がその場を支配していた。こんなことが異常であるのは、不良である今村にとっては容易に理解出来た。教師との間のトラブルで、そのようなことが多々あったからだ。教師の激昂に慣れた身とはいえ、これほどまでにしんとした静寂には思わず身震いしてしまう。今村は下唇を噛み締め、肉切り包丁を装着し

たホッケースティックをしかと握り直した。

「先輩」

「待て」

朔哉は今村を制した。

『ギアアアアアアアアアアッ!?!』

激痛と困惑が錯綜する中で、苦痛によるめく生徒の姿が朔哉の脳裏に浮かび上がった。

『あつ！うわっ！やめろ！！血が！血が！歯が腕に食い込んでんだ！！な……何！？やめろおおおおお！！千切れる！！千切れる！！あ……あああああああああ！！！！ブチッ！！ぐあああああああああ！！！！！！！！』

「……いきますか？」

今村が放送室へと続く道を指差す。

「いや、もう無駄だろう。今はまず」

次の言葉を、朔哉は思わず飲み込んだ。すぐ背後で、床板がぎいっと軋んだのだ。誰かがいる。息を殺して、ゆっくりと振り返った。

「うわあああああああああ！！？」

悲鳴を上げたのは今村だった。口許と白地のシャツを真っ赤に染

めた体育教師、手島　だった者　がそこには立っていたのだ。
手島は震えを帯びた喘ぎ声を漏らしながら、こちらに迫ってきている。履き古されたズボンは、血と便と腸の内層を排出したことから黒く染まっていた。周囲の床は、それら排泄物によって覆われていた。

「くッ……」

朔哉がようやく声を漏らした時、今村は恐怖のあまり震えていた。

「おい、今村！」

「は……はい？」

今村は唇を震わせ、何とかその声を絞り出した。

「これが現実なんだ。よく見てろ」

朔哉はポストンバッグを床に下ろし、今村を押しつけるようにして前に立った。シヨベルを手島の切っ先に掲げる。まるで銚でも持つかのように、シヨベルは両手で握り締められていた。朔哉は奔った。ミディアム・カーボン・スチールが煌めき、そのエッジが首筋に到達する刹那　手島の首は飛んでいた。

朔哉と今村の視線が、手島の首に注がれる。血と汗にまみれて、濡れそぼった髪が顔にへばりついていて、目や口、耳などからは血が滲み出てくる。朔哉も今村も言葉を忘れて、凝然と立ち尽くしていた。

「あ……あ……」

末期の呻きが静寂の中で響き渡る。と、同時に雪崩のごとく生徒達が押し寄せ、こちらに迫ってくるではないか。朔哉は目を落として、手島の首に一瞥をくれた後、ボストンバッグを背負い直した。

「いくぞ！今村！！」

朔哉は軽く今村の頬を平で打ち、行動を促した。

#7: Spring of the dead - Part :3

『ぐあああああああああ！！！！』

藤美学園2年生の「平野 コータ」は絶望に満ちたその放送を聞いた。衝撃が体を貫き、そこまで暑くないのに、一筋の汗粒が頬を伝う。そのまま何も言わずに身を屈め、肩を窄めて、猫に睨まれた鼠のようにしてそくさと教室の扉を目指す。自分はヒーローではない、名脇役なんだ。そうして平野コータという少年は、これまでの人生を過ごしてきた。そして、この非常時でもそれは変わらないのだと彼自身、自負していた。

コータは音を立てずに扉を開けた。泥棒のように疑心暗鬼な視線を左右に向けたが、廊下には誰の姿も無かった。ほっと安堵の息をつき、彼は「2年B組」の教室から出ようと決心した。

「平野……」

何者かが彼の名前を呼んだ。振り返ると、そこには同級生である「高城 沙耶」の姿があつた。真顔で、それでいてどこか澄ましているような顔だったが、同時にこの異常な事態に怯えている、という感じでもあつた。言い切った後には、彼女の突き刺さるような視線が向けられていた。

「たた……高城さん……」

「逃げるよ」

口の中の苦味を噛み締め、彼女は言った。

「はい」

コータが答える。沙耶の放った言葉は端的なものだったが、言葉よりも雄弁に語ったその目が、事の重大さと早急な行動を促している。2人はその後、無言となり、早足で教室棟を抜けていった。

* * * * *

- # 7 -

：「Spring of the dead - Part : 3」

「ここよ。さあ、早く入って」

焦りを滲ませた硬質な声に、カラカラカラという引戸の乾いた開閉音が続く。

「技術工作室」 高城沙耶が連れてきたこの教室の立札に、コータは一抹の疑問を覚えた。この異常な事態を前に、高城さんはここで何をしようとしているのか？そして、自分は本当にこの学園から生きて脱出出来るのだろうか……と。

「高城さん。ここは何」

「しつ。誰か居る」

何かの気配を感じ取った沙耶は、注意深く技術工作室の中を覗いた。何者かが木製の工作机に向き合い、何か紐状の物体を手に取って、“矢”のようなものを作っていた。やや赤みを持った茶髪はサ

イドテールで整えられていた。左右に揺れるミニスカートと、漆黒のストッキングの間にみせる太ももは初雪のように白く、眩しい。

「アンタ……」

と不安げに告げた沙耶は、どうやらその正体を暴いたようだった。

「……………何？」

小さく、それでいて透き通った声が響く。声の主は後ろを振り返った。

「あ！如月さんじゃないですか」

「平野。あんた如月のことを知ってんの？」

コータは瞠目して頷いた。「如月 アリサ」、2年A組のその少女のことを、彼は義兄たる「如月 朔哉」との親交によって知っていた。コータの入学当時から朔哉は彼と知り合い、元帝国軍人で帰還兵たる曾祖父「如月 貫太郎」の話や軍事関係の話題で意気投合した。以後、朔哉はコータにとっての唯一無二の親友となっていた。

「3年の如月先輩とよく付き合ってもらってますからね。知ってますか、先輩の曾おじいさんのこと？」

沙耶は頷いた。「フィリピンからの帰還兵、如月貫太郎でしょ？ パパや憂国一心会の人達がよく話してたのを覚えてるわ……」って、今はそんなことを悠長に言ってる場合じゃないわよ。ああ……もうっ！無駄に時間がなくなっちゃったじゃないの！」

「ところで、如月さんは何を作ってるんですか？」

コータが遮るように言うと、沙耶は怒りの色を瞳に浮かべた。

「平野！アンタ、人の神経を逆撫でする才能でもあるワケ！？本当に空気が読めないわね。そんな女に尻尾振ってる暇があったら、とつと扉に鍵を閉めて入られないように固定しなさいよ！」

沙耶の逆鱗に触れたとみて、コータは慌てて扉の錠を閉めにかかる。

「高城さん。閉めました！」

振り返り、叫んだ声には、疲労と不安が入り混じっていた。が、同時にこの状況を望んでいるかのような、そんな一縷の希望も含まれていた。

「それで如月、アンタここで何してたワケ？」

と沙耶が呟くと、アリサは少しだけこちらに顔を向けた。

「……………スリングショット用の弾を作ってたの」

アリサは答え、華奢な左手に握られたスリングショットを見せた。スリングショットはY字型の桿を始めとする枠構造にゴム紐を張った、狩猟・護身用武器の一つである。この武器の特徴は何といったも石や木の実といった、自然のものまで弾として使用出来ることだろう。上手く扱えば無限の弾数を持つ武器として利用出来るのだ。但し、威力が高いとは言い難いが。

「アンタ、学校になんて物持ち込んでんのよ」

と、沙耶は突っかかる。

彼女とアリサの間には“英語”の成績で大きな因縁があった。1年生の夏、小・中とそれまで学年成績のトップを常に保持していた彼女は、ここで初めて英語という教科において如月アリサに負けたのだ。それが悔しくて沙耶はリベンジを図ったが力及ばず、冬の成績でもアリサにトップの座を奪われたままだった。結局、藤美学園での1年時はアリサの勝利に終わったのである。

「…………護身用だよ。高城さん」

と、アリサは冷静な声で言った。

「如月さん。僕の推測だと、鉛弾程度の威力じゃ《奴ら》に対処出来ないと思うよ」

すぐ隣にありながら、一瞬つまはじきにされていたコータは言った。

「…………うん。だから、殺傷力の高い弾を作ってたの」

アリサはそう言い、その殺傷力の高いとされる弾を見せた。有刺鉄線の針金を一本の針状に伸ばし、それを球体状に丸めた石粉粘土に突き刺したという。まるでキノコのような形状をしていた。無論、発射する時はそのキノコの傘をゴム紐に押し当てて使う。

「有刺鉄線…………確か、学園のプールに誰かがブルーギルやブラックスバスの死骸を捨てる事件がありましたよね。その時にプールを囲うフェンスに有刺鉄線を立てて、誰も入れないようにしようって計

画されてたらしいですけど、景観の問題や警備員の数を増やしたこともあって、結局やらすじまいでしたっけ」

コータは講釈した。この有刺鉄線も、その計画の為に調達されたものの余剰品らしい。

「……………針金式スリングショット弾。“ミセリコルデ”」

「ミセリコルデ……………ああ。ステイレットですね？」

アリサは僅かに口許を緩ませた。

「ステイ……………何？」

沙耶は困惑気味に言った。

「ステイレット。中世ドイツの短剣ですよ。剣自体は針金みたいに細くてですね、鎖帷子や鎧チェインメイルの隙間を狙って敵の生身を突き刺す武器で、瀕死の重傷を負った騎士に止めを刺す武器でもあったことから、『慈悲』という意味を込めて英語では『ミセリコルデ』とも呼ばれていたんです」

と、コータは淡々と答えた。軍事関係の知識では、流石の沙耶も敵わない。

「でも、他にも弾はあったんじゃないの？釘とかでも良かったんじゃない」

沙耶の問いに、アリサは首を振った。

「……………長さが足りない。それに、鉄線の方がよく肉を挟る」

淡々とアリサは言った。

「にしても『慈悲』だなんて、この状況じゃ皮肉としかいいようがないわね」

沙耶は言った。「とにかく、“ステイレット”だか“ミセリコルデ”だかはこれまでにして、こっちの本題に入るわよ。いい？」

コータとアリサは静かに頷いた。

「じゃあ。これ、なんだか分かる？」

と、沙耶は机に並べられた技術工作室の備品の数々を見せ、サブマシンガンのような特殊な工具を指差した。先程、コータとアリサが話している内に用意しておいたのだ。

「釘打ち機……ガス式か！」

「当ったり前じゃない！映画みたいなコンプレッサー式じゃ、持ち歩けないでしょ？……バツカじゃないの？」

沙耶はそう言うが、コータにとってバカと言われるのは慣れっこだった。軍事知識には充実していても、一般常識や普通教科に詳しい訳ではない。中くらいの成績に下くらいの運動神経、そして下という外見ともなれば、誰もが一度は“バカ”や“デブ”と蔑むのだった。特に、教師たる紫藤浩一には何度その言葉を言われたことだろうか。その声は冷徹で、無関心で、辛辣なものだった。あれに比べれば、沙耶の言葉など痛くも痒くもない。

「映画、好きなんですか？」

「バツ……バカ言ってるじゃないわよ！！あたしは天才だからなんでも知ってる……」

唸り声。

ここにいる誰の声でもないのがすぐに分かり、沙耶は思わずたじろいた。《奴ら》はすぐそこまで迫っている。ここは錠を掛けた密室で、その扉しか出口はない。まさに、袋の鼠状態。

「予備のボンベが一本。釘は……心配ないな」

「ナニ呑気なこと言ってるのよ！そこまで来てるわよっ！」

「重さは4キロ位か。旧式のライフル並だな……このままじゃ安定して構えられない……」

「ちよつとアンタ！聞いてんのっ！？」

ぼそりと漏れるコータの声には、只ならぬ歓喜が満ちていた。自分の専門知識が如何に役立つか、そして現実に通用するかを試すことが出来る。すぐ隣にありながら、沙耶とは全く別の世界に浸っている背中が、薄闇の中で静かに映えていた。

ドンッ！ドンッ！

鍵の掛けられた扉が、《奴ら》に打ち付けられる鈍い音が響いた。日本の扉は脆い。このままでは持たないことを、沙耶は直感で感じ取った。

「ひ……平野おっ……」

沙耶の声が恐怖にうち震える。

「……………下がって!」

突然、部屋の奥からシリングショットを構えたアリサの音が響いた。彼女は「ミセリコルデ」弾をゴム紐に押し当て、その華奢な腕からは考えられない程にゴム紐を引き絞った。これほどまでに腕力があるのは、彼女が「アーチェリー部」で洋弓道を嗜み、クロスボウ競技を趣味としてやっているからだ。また、生まれつきの才能もあるのだろうが、精密射撃技術に長けていた。

そして『慈悲』は放たれた。ミセリコルデ弾は張りつめた空気を切り裂き、一間の鈍い音が大気を振動させたかと思うと、最初に入ってきていた《ターゲット》の額に弾がめり込んでいた。鮮血を撒き散らし、後頭部に慈悲を与えられた男子生徒が、狭い出入口を塞ぐようにして倒れる。

「……………Good Kill」

アリサは忍び笑いを微かに浮かべ、密やかに言った。

「や……やるじゃないの……」

流石の腕前に如月アリサを見直した瞬間、背後から複数の唸り声が響いて、更なる《ターゲット》がその姿を現した。誰もが黒ずんだ血を吐き、顔や制服を黒く汚していた。

「如月!早くアイツらも殺りなさいよ!」

「……………だめ。スリングショットは……………時間が掛かる……………」

スリングショットの弱点の一つは連射が難しいことである。手際よくやれば時間を短縮は出来るが、それでも銃のような使い勝手さは実現出来ないのだ。

「……………い、いやあああああああつ!!」

複数の《奴ら》の薄汚れた腕が沙耶に迫るその瞬間、背後で何かが弾ける音が響いた。すると、一筋の閃光が沙耶の視界に迸り、それと同時に一本の釘が《奴ら》の一人を刺し貫いた。その後も、コータの持つ釘打ち機が咆哮を上げ、釘は吸い込まれるように額へと辿り着いた。

「良し!」

「ひ……………平野!」

コータの変わり様に沙耶は驚いた。まさに別人。これが平野の本性なの?

「そのドリルとか釘とか、適当な袋に詰めておいてください! あ、工具箱も」

コータの豹変振りに圧巻されていた沙耶だったが、はっと我に帰った。

「何よアンタっ! 平野のクセにあたしに命令するっての!」

コータの顔がわずかにこちらを見る。が、闇を抱えていた表情は一変、普段の温厚で柔和なコータが見せる、優しげな笑顔に変わった。

「……お願いしますう」

沙耶は何とも言えない、苛立ちにも安堵にも似た感触を覚えた。

「わ……分かったわよ」

結局、沙耶は呆れながらも承諾する。せつせと技術工作室の備品を詰め込み、コータとアリサの姿を見張った。

そうこうしている内に《奴ら》の姿は消え、技術工作室は再び平穏な空間へと舞い戻った。しかし突然、「ジリジリジリ」と火災を知らせる警報音が校内に鳴り響き始めた。それと同時に3人は、窓を流れ落ちる大量の水を確認した。

「え？え？火事っ！？」

「最低ね。ほらっ、何してんの！あんたもこのバッグ持ちなさいよ」

「いやっ……え？え？」

当惑するコータに、沙耶は業を煮やして言った。

「逃げるのよ！ここから」

その言葉に、ようやくコータも落ち着きを取り戻した。

「如月、アンタも来なさいよ。一緒に来るのよ!」

アリサはこくりと頷いた。

「あ、あの……高城さん、一つ聞いてもいいですか?」

そう言い切ると、コータは真剣な顔を浮かべた。

「なによ?」

「あの……どうして……僕と?」

「……別に。大した理由なんてないわ」

コータは小さく肩を落とし、同時にため息をついた。「……そうですねえ」

確かに、彼女は開校以来最高の天才美少女だ。でも、これからは違うかもしれない。事実、この部屋での出来事において、僕や如月さんが居なかったら、どうにもならなかったかもしれない。だから、僕は……俺は、この女と一緒^{ひと}に行動するという偶然という名の運命に従い、何があっても必ず彼女を守る。この地獄と化した世界から守ってみせる。

コータはそう胸に呟くと、すぐに沙耶とアリサの後を追った。彼女達は　というよりも沙耶が一方的にだが　暫しの時間を口論に割いている。コータはその先の、見えない闇に向けて釘打ち機の銃口を掲げた。

「何?いきなりその気じゃない?……何か分かったちゃったワケ?」

コータは頷いた。「何か分からないけど、分かりましたあっ!!」

沙耶は驚いたような、それでいて嬉しそうな顔を見せた。

前方には“絶望”が待ち受けているけど、何も焦る必要はない。

新たな世界、新たな一日は、新たな仲間とともに始まったのだから……。

「さあ、いくわよ!」

沙耶は笑みを漏らし、明るい陽差しのなかへ歩み出した。

#8: Spring of the dead - Part: 4

『上は大火事、下は大水な んだ』というなぞなぞがある。率直に“お風呂”と答える人間がいれば、少し捻って“船上火災”という人間もいるだろう。しかしこの時、幼馴染である「宮本 麗」とともに校舎屋上の天文台に逃げ込んでいた「小室 孝」は、このクソったれな状況”こそが答えに違いないと思った。下は屍人達奴らの洪水で、上は身を焦がしそうな紅い暁空。その空は、街の至るところから燃え上がる炎と煙に包まれ、まさに大火事のような熱気に包まれていた。

「孝……手伝ってくれないか」

同級生で親友の「井豪 永」は、口の中の苦味を噛み締め、言った。彼は孝が右手に持っていた金属バットを指差そうと思ったが、躊躇いがちに首を振った。代わりに目を向けたのは、本来屋上から転落して人が死ぬのを防ぐ目的で作られた金属製の手すりだった。

「……何をだよ？」

「あそこから……あそこからなら地面まで真っ直ぐに……」

「お、おい……」

「多分……ぶつかった衝撃で頭も割れるはずだ」

永が指差す方向を見て、2人は飲み込んだ息を吐き出すことが出

来なくなつた。手すりの先、“洪水”に永は自らその身を投じようとしている。彼は、左腕から大脳部、更に下つて足先まで燃え広がろうとしている“大火事”に耐え切れなかったのだ。

「なに言つて」

「俺は《奴ら》になりたくない!!」

永は咳込みながらも言つた。口からは黒い吐瀉物が吹き出し、事態の深刻さを告げている。

「な、孝。頼む……。俺は最後まで、俺でいたい……」

そう永が言つた後、孝がぎゅつと拳を握つたのと、俯いた麗の頬を一筋の涙が零れたのは、同時だった。それまでただ傍観していた肩がぴくりと動き、ちらりとだけ振り返つて麗を見た孝は、すぐに視線を虫の息で喘いでいる親友、永へと戻した。

「うげえっ！ゴホッ、ガッ……アアアアアアアッ!？」

永はがくつと前にのめり、膝を崩すと同時に、信じられない量の血を胃から吐き出して、悲痛な呻き声とともに床に撒き散らす。次の瞬間、彼は目眩とともに完全な脱力感に襲われ、意識を失いかけたまま仰向けに倒れる。唯一聞こえるのは、気管支を真つ黒な血で詰まらせながらも何かを伝えようとして生じた、墨色の泡のブクブクという気泡音だけだ。次いで、シャツを引き裂いたような音がする。何者かが永の脳神経を食い干切つたのだ。まず、人間の高度な認識機能をつかさどる“大脳新皮質”が真つ二つに引き裂かれ、次いで感情をつかさどる“大脳辺縁系”が押し潰される。残つたのは、そのずつと奥に隠された“脳幹” 俗に『ワニの脳』と称される

と呼ばれる機能だが、これは人間の自己保全のための『本能』をつかさどっている。《奴ら》が理性を失い、食欲のみに執着しているのはこれしか機能していないからなのだろう。すなわち　いまや永の脳は、“人間”というタンパク質の塊の生命活動を維持させるにその機能を留めているのだ。

1機のジャンボジェットが国内路線に乗って、爆音を上げつつ床主市上空を飛び続ける。頭上で甲高い飛行機音が響き渡り、足元からは《奴ら》のオーケストラが呻き声の不協和音を奏でる中、遂にその意識を失った永の形骸は、ゴトリと鈍い音を立てて床に崩れ落ちていた。目や口から黒い血を流している。

「離れるんだ、麗」

両手で金属バットを強く握り締め、孝は言った。

「駄目っ！そんな事しちゃ駄目っ！！」

悲哀に満ちた麗の声。だが、孝は歩みを止めなかった。

「ならないわ！永は《奴ら》なんかにならない！！永は“特別”なのよ！！」

「……離れる」

冷然とした、普段の孝からぬ双眸そうぼうは、なおも永の形骸に向けられていた。それを制そうとしていた麗が思わずたじろいた瞬間、永の身体がピクツと反応した。

「永……？ほら孝、永が死ぬはずなんてない」

ボタボタと垂れ落ちる黒い血を見て、麗は言葉を切った。唸りにも、呻きにも似た奇声を発しながら、立ち上がる永。その体は左右に揺れ、バランス感覚を失ってしまったことを物語っている。その紅く染まった眼窩は、不気味に陥没した瞳を作り出していた。

「永っ!？」

呆然とその場にへたりこんでいた麗は、なおも恋人たる永に抱きつこうとした。が、すんでのところで孝に服を掴まれ、後ろへ引き戻された。

「そんな……こんなウソ……ウソよ……」

「……確かにバカバかしいよ」

孝は静かに呟いた。

「でも……」

孝は金属バットを振り上げ、構えた。照準は一点のみに絞られている。この至近距離なら永の死は確実だろう。問題は、それを躊躇なく実行出来るか だった。

「本当なんだ!?!?!」

バットを振り上げ、孝は奔った。永はそれに気付いたのか、地面に向けていた視線を上げた。瞬間、グチャッ!と、何かが弾ける音がして、周囲に衝撃が走った。

「いやあああああああつ!?!?!」

生暖かい血が、肉が、骨が、まるで水風船でも割ったかのように孝に降りかかる。助走について放たれた一撃は頭蓋骨を砕き、喰い尽くされてぐちゃぐちゃになった脳を粉碎したのだった。脳天から顎を一直線に駆け抜けた衝撃に、永は背中から派手に倒れた。

孝はその場に立ち尽くすばかりだった。終始無言で、夕焼け色に染まる床主の空を見ていた。

一方、麗は腰を屈めて、永の遺体を呆然と見据えていた。頭頂部に紅く膿んだ裂け目が見えた。どくどくと黒い血を流し続けている。それを見た麗の顔が驚愕と絶望に歪むのを、孝はただただ見つめることしか出来なかった。そして、キツとその表情を変え、麗はこちらを睨み付けてきた。

「なんで……なんで……!!」

「……やらなければ、麗が喰われてた」

孝は言った。

「私が……」

麗は言葉を切った。「私は……助けて欲しくなかった!! 永のこんな姿なんて見たくなかった!! こんな風にして生き残るくらいなら永に噛まれて……私も《奴ら》になりたかったのに!!」

「……奴がそれを望んだとは思えない」

「孝に何が分かるっていうの?」

麗は涙を流しつつ、声がうわずりそうになるのを抑えながら言った。

「そうだわ……そうだったのね！孝は……本当は永を嫌っていたのね。……私と付き合っていたから！！」

麗の言葉に孝は瞠目した。それはあながち間違っではない。奴は……井豪 永は唯一無二の親友であったと同時に、煩わしい存在でもあった。学業優秀、スポーツ万能、そしてリーダーシップに富み、常に人の一歩先を行く存在。

永は両目を閉じて、あのときのことを思い出した。これまで生きてきた人生の中で、一番つらかった時ののは、やはり去年だった。思いつくまいとしても、留学処分を受けた麗の悲哀に満ちた顔がくり返し蘇ってきた。

けれども……けれども人生には放置出来ない問題が一つは存在する。自分の意識を別のことに反らして、その忌わしき記憶に蓋をしたとしても、ほんの些細な出来事で人はそれを思い出す。繰り返せば繰り返す程、その記憶は明瞭なものとなり、やがて蓋が出来ないように頭に染み付いてしまう。そう、それはあのことだって例外じゃないのだ。そこで孝は、その問題に自分なりのケジメを付けようと決意した。

孝は静かに 歩き出す。

「ちょっと……どこに行こうつてのよ」

「俺と一緒にいたら邪魔だろ。下に降りて、《奴ら》を叩いてくる」

「え……？な、何言ってるのよっ！一人でどうにかなる訳ないじ

やないっ!!」

麗にとつての最善の方法は何だろうか。孝は懸命に頭を絞った。その答えがこれだった。つまり、永への愛と理性が格闘する中で麗を絶望の淵に追い落とし、好きなだけ悲しませる……。ある意味では、慈悲深い行為だと言えるのかもしれない。少なくとも、彼女は“現実”を直視できる。それはまず間違いない。でなければ彼女はあの永の遺体と一生を共にするか、若しくは永のような末路を辿るかもしれない。だがそれは麗にとつても、死んでいった永にとつても、望まれる結末ではないだろう。

「ねえ……孝……？」

「……………」

孝は無言のまま、机とセロハンテープで築かれたバリケードをよじ登る。永が居なければ、これほどまでに完全な防御壁は築けなかっただろう。これがあつたから《奴ら》に襲われない安全な時間を過ごすことが出来た訳だ。だが、いまや孝にとつてそれは命を賭けた“償い”の、ほんの些細な障壁に過ぎなかった。

「駄目っ！駄目えっ！やめてえっ！」

麗は強く首を振って、唇をぎゅっと噛み締めた。そしてバリケードをよじ登る孝の右脚を、必死になって強く抱きしめた。

「ごめんなさい、ごめんなさいごめんなさい……ごめんなさい……！」

彼女の頬を大粒の涙が流れ落ちる。孝は何も出来ず、石と化した

ように、ただ呆然と眼下で涙を零す少女を見据えた。

「本気じゃないの！本気で言ったんじゃないのっ！！」

麗はわなわなと身を震わせ、全身から悲痛な叫びを迸らせて言った。

「お願い！お願いだから一緒に……一緒にいてえっ！！」

麗の悲嘆を目のあたりにして、孝はやるせない思いに包まれた。彼がゆつくりとバリケードから降りると、麗の美しい顔を覗き込みながら、何も言わずに彼女を抱き締めた。彼は、自分の人生が延き伸ばされたことと、麗が自分を頼ってくれているという二つの無上の喜びから、抱き締められずにはいられなかったのだ。

「一緒にいるよ、麗」

煌々と燃え広がる深紅の空を見上げて、孝はいつそう麗の体を強く抱き締めた。

「君が……君がそう……望む限り」

* * * * *

- # 8 -

∴「Spring of the dead - Part : 4」

『ゾンビ』

他にどういう説明がつくだろうか？

過去数時間の出来事をつぶさに振り返って、私立藤美学園の校医、「鞠川 静香」は、フィクション上の『ゾンビ』 というカテゴリーを全く除外した仮説が立てられるかどうか、じっくりと考えてみた。 が、それはやはり不可能だった。“エボラ出血熱”のような凶悪な毒性に“狂犬病”のような狂暴さを備え、“インフルエンザ・ウイルス”のように圧倒的なスピードと範囲で感染者が増えていく。それに付け加えて、感染者はウイルスに犯されて死亡した後も、『奴ら』となって血液感染を続けていくのだ。

「ふう……。大変だわあ……。これは」

この『ゾンビ』だという仮説が本当なら、感染者が起き上がって生者を襲い掛かる理由もつく。感染者は脳をウイルス体によって破壊され、理性をつかさどる部分を失ったのだ。

脳とは機械でいうところの集積回路（IC）のようなもので、その回路が焼き切れば機械本体も制御を失って動かなくなる。この一連の伝染病もそれと同様だが、違うのは脳の各箇所を焼き切ってしまうと同時に、一部の機能を保全してしまうところなのだろう。ウイルスは宿主の生命維持機能のみを許し、理性といった人間的な部分を捨ててしまったのだ。

「困ったわあ……。警察も消防も繋がらないし、手当てをしても噛まれた人は絶対に死んじゃうし、噛まれて死んだ人はリビングデッド化しちゃうし……。これじゃあまるで、ロメロの映画みたい……」

薬品箱を手にして、静香は眉を顰めた。

「んな関心してる場合ですか！！逃げましょう、静香先生！」

黒い凝乳状の血でベトベトになった点滴装置を手に、2年生の石井は叫んだ。

「ん……ちょっと待って。持ち出せるだけ持ち出さないと……」

「なるべく急いでくださ」

ゼイゼイと息を荒くして、石井が更に切迫した口調で言いかけた時だった。耳を劈くような凄まじい音が巻き起こり、窓ガラスの破片が次々と保健室の床に砕け落ちた。そして保健室の窓や扉から多数の腕が伸び、乾れた唸り声が二人の耳に入り込んできた。

静香はパチパチと瞬きした。まだ生温かい、明るい赤みを帯びた血で濡らした一本の腕が首元めがけて突き伸びる。やられる！と思った静香だったが、その瞬間、石井がその前に躍り出て、黒班を付けた点滴装置を振り回して《奴ら》の魔手を退けた。

「静香先生、逃げてくださいつ！！」

石井は、静香の驚愕に満ちた顔を見返した。それが仇となったのかもしれない。次の瞬間、群衆のうちの二体が、石井の両肩めがけてその歯を突き立てたのだった。

「ぐああああっ！！」

石井は叫んだ。両肩の傷口から鮮血が滴り落ちる。

「先生！は……早く逃げて……っ！」

「ああ……ああ……」

静香はその言葉を理解したのかしなかったのか、石井を指差しながら狼狽した。

「君……名前何だっけ……」

「……は？」

一瞬、答えに窮しているらしい静香の顔を見ながら石井は、入学当時、学園の入学式で静香先生を初めて見、その声を初めて聞いた時のことを思い出した。あの時の静香先生は、今のよう到大勢の生徒を前に困惑し、何だか訳の分からないことを言っていたような気がする。これまで石井は、医師というのは何でも知ってて、人の上に立つような存在だと思っていた。が、今のように答えに詰まっている彼女を見てみると、医師という職業以前に、それに就いているというだけでその人間を偏った目で見ていた気がしてならなかった。静香先生は静香先生なのだから……。

「ああ……ごめんなさいっ！」

静香は石井、《奴ら》、石井、《奴ら》と戸惑うようにしてその視線を泳がせる。彼女の口から悲哀の言葉が漏れた時、石井はフツと小さく微笑した。

石井の体が床に突っ伏したその時、《奴ら》の一団の標的は静香に変えられていた。静香はたじろぎ、後ろずさった。逃げ道はない。こんな時、映画ならば死ぬか、遅れた頃にやってきたヒーローによって助け出される筈だろう。静香は後者に望みを託すしかなかった。が、彼女自身はもう全ては終わったと確信していた。

「うらああああああああっ……」

だが、予想は思わぬ闖入者によって裏切られた。先端のブレードに肉切り包丁を固定したカーボン製ホッケースティックを持った不良風の男子生徒が咆哮し、扉前で呻いていた《奴ら》の一人の首が宙を舞った。続いて、シヨベルが《奴ら》の群衆の中を乱舞して、一体、二体と《奴ら》の首なし死体が床に崩れ落ちる。最後に、木刀を持った黒髪の少女が軽やかに舞い、《奴ら》の頭蓋を陥没させた。ホッケースティックとシヨベルと木刀という、異色の組み合わせで繰り広げられた剣舞は、最終的に多数の死体を生み出した。

「はあ……はあ……」

血塗れになって床に崩れ落ちていた石井は、保健室に颯爽と入って来た黒髪の少女の顔を見上げた。右手に木刀を携え、その木刀には黒い血がこびり付いていて歴戦の記録を物語っていた。次に入ってきた、シヨベルを持ち、黒色のボストンバッグを肩に掛ける少年がその少女の隣に立ち、不良風の少年は肉切り包丁付きホッケースティックを構えつつ、背後を気にしながら入室した。

「……私は剣道部主将、毒島冴子だ。2年生、君の名前は？」

冴子は身を屈め、石井の肩に手を置いて言った。

「石井……かず……ゴホッ！」

石井の様子を見て、すかさず静香が救急鞆を持参して駆け寄るが、冴子はそれを制した。

「石井君、良く鞠川校医を守った。君の勇気は私が認めてやる……」

一瞬、冴子は顔を上げて朔哉を見た。いまの冴子の声に、何か断固たるもの、滅多に表面に見れないものを感じ取っていた朔哉は、「転生者」としてのこの場面の記憶も含めて、静かに頷いた。

「噛まれた者がどうなるか知っているな？親や友達にそんな姿を見せたいか？君が嫌だと言っのならば……これまで人を殺めたことはいが……」

冴子は息を飲んだ。その顔は凜としていた。「……私が手伝つてやる」

「お……お願いします」

微笑を浮かべ、石井は小さく頷いた。涙が零れ、口から溢れ出す血を滲ませる。

「え、ちよつ……ちよつと何を……」

「校医といえど、邪魔しないでもらいたい……」

医師である静香は阻止に入った。が、石井の問題は現代医学が少なくともこの時点の医学レベルが 解決出来るものではなく なっていた。石井当人が決めた事に、静香が反駁することは許されなかった。

「男の誇りを守つてやる事こそが……女たるの矜持スタイルなのだ」

刹那、冴子の木刀が振りかざされ 血が、肉が、骨が舞った。

窓ガラスは紅く染まっていた。そして、そんな窓ガラスを背に、石井は永遠の眠りに着いた。

#9: Spring of the dead - Part:5

自分達がここまで来られたことが、「今村」にはほとんど信じられなかった。死してなお、襲い掛かってくるという抜け目のない敵に遭遇したにも関わらず、また、幸運ばかりが続いた訳ではないにも関わらず同学園の先輩「如月 朔哉」と「毒島 冴子」、そして校医の「鞠川 静香」の3人とともに何とか保健室周囲の敵を一掃し、今は全員が管理棟の廊下にいた。

一行の内、今村と朔哉と冴子の3人が戦闘態勢を整えていた。3人はそれぞれ、肉切り包丁付きホッケースティック、木刀、スぺツナズ式軍用シヨベルを携え、静香を中心に朔哉と冴子が前衛、今村が後衛を担うフォーメーションを維持しつつ、群ってくる《奴ら》に対処する。静香は武器も持たず、医療品等を詰めた救急鞆を重たそうに抱えていた。戦闘要員の3人は近距離戦闘用の武器しか持ち合わせてはいなかったが、それぞれが1ヤードほどの全長があった。つまり、3人の戦闘行動範囲は1ヤード以内に定められていた訳である。そして、今村を除いた2人ならば、時としてそれ以上の範囲に向けても安全に攻撃を仕掛けるだけの余裕があった。

「だが……、なるべく敵との戦闘は避けた方が良い」

と、朔哉は言った。

「どういうことですか？《奴ら》、そんなに強くないですよ」

今村は不思議そうに首を傾げた。

「そういう問題ではないのだよ、今村君」

冴子は木刀を突きだし、襲い掛かってくる《奴ら》の一体の動きを制した。

「出くわす度に頭を潰すのは、足止めされているのと同じだ。取り囲まれてしまう。それに、腕力は信じられないほど強い！ 掴まれたら、逃げるのは難しい」

「なるほど……」

今村は考えるように頷いた。

「はーすごいよね…… ひゃんっ!？」

後ろで冴子の話を聞き、関心する静香だったが、足がもつれて転んでしまった。《奴ら》が居なかったのが、不幸中の幸いであった。

「大丈夫っすか!？ 静香先生」

「やーん! なんなのよ、もー!」

静香は地面に座り込んで愚痴を漏らした。今村の方は屈み込み、心配そうに声をかけていた。前衛を務めていた冴子は小さくため息をつき、腰を屈めて黒色のスカートを覗き込む。

「走るには向かないファッションだからだ」

冴子はためらわなかった。タイトスカートのスリットに手を伸ばして、それを深く引き裂いた。

「ええっ!？」

静香は驚嘆した。スカートは深く裂かれ、スリットが広げられた。男2人は啞然としてその光景を眺めている。引き裂かれたスリットからは、彼女の下着が見え隠れしていた。

「あーっ！これプラダなのー！」

悲鳴に似た声を上げる静香に、冴子は再びため息をついた。

「ブランドと命……どちらが大切だ？」

「……っ、両方……！」

と、静香は言い放つ。すると冴子はまた小さくため息をつき、当惑を顔を浮かべて立ち上がった。

「毒島先輩……グッジョブ！」

今村は涙目になりながら、親指を立てて言った。彼の視線の先には、なおも床に座り込む静香の姿があった。

「何か良からぬ事を考えているようだね……今村君」

と、冴子は怒りも露に冷たげに言い放つ。

「それに朔哉も。……どうやらその性根、稽古で叩き直す必要がありそうだな」

「……っ！？ち……違う、違うから！そついうんじゃないからな！冴子」

冴子の指摘に、朔哉は当惑しながら慌てふためいた。が、状況は朔哉にとつても、この場にいる誰にとつても芳しくないものとなりつつあった。微かにだが、廊下の先から物音が聞こえたのだ。

「……冴子」

「ああ……分かれている。職員室のようだ」

冴子は彼の肩越しに廊下の先を見て言った。職員室は本来、この一行が向かう筈だった目的地だ。だが、《奴ら》が居るといふのは、とても喜ばしいものではない。

「急ごう。グズグズしてはいられない」

冴子の言葉を区切りに、一行は職員室を急いだ。

* * * * *

- # 9 -

:「Spring of the dead - Part : 5」

一時的な避難場所として期待出来る「職員室」は目の前だというのに、「高城 沙耶」にはとても遠く感じられた。原因は、目の前に迫り来る《奴ら》の大群のせいだ。職員室は廊下の突き当たりに位置し、他の侵入箇所を持たない。だがそれは、同時に逃げ場がないことを意味する。ここで《奴ら》との戦闘を断念し、ひとまず職員室の中に駆け込むことも出来たが、必死になって《奴ら》と戦う「平野 コータ」と「如月 アリサ」が安全に逃げ込める保障はな

かった。1人が囷となれば、2人は確かに助かるかもしれないが、その囷には大きなリスクが付き纏う。それに、《奴ら》の腕力は驚異的なものだった。それは「技術工作室」で呆気なく破壊された扉が物語っている。職員室内の家具を使ってバリケードを築けば、なんとかならないこともなかったが、そうするだけの時間的余裕はなかった。

そんな、遠く感じられる職員室の扉を背に、コータとアリサは戦っていた。コータはガス式釘打ち機を改造した、銃器とも呼べる得物を手にトリガーハッピーを決め込み、アリサはゴムの強化等を実施して改良された狩猟用スリングショットと「ミセリコルデ弾」を武器に《奴ら》と対峙した。高速で発射された釘が《奴ら》の腐った脳天を突き抜け、有刺鉄線と石粉粘土で作ったミセリコルデ弾

『慈悲』弾 がその間を駆け抜けて、同じように《奴ら》の頭に紅い血の華を咲き誇らせた。空気によって硬質した粘土球がストッパーの役割をしていて、戦闘中にアリサは近くに倒れていた《奴ら》の額から発射弾を引き抜くと、使える物だけを精査して再び使用することもあった。

「高城さんも戦ってください！僕と如月さんだけじゃ……」

「なんでアタシがそんな事しなきゃなんないのよ！」

コータが切迫した声で喚く。沙耶は相も変わらずツンと澄ました、それでいて心の奥底では怯えているような様子で立ち尽くすばかりだった。

ピューー！……………。

突然、アリサが甲高い口笛を吹いた。

「ちよっ……アンタ！何やってんのよ。こっちの居場所が《奴ら》に分かるじゃない！」

と、沙耶は声を張り上げた。

「弾を取って！あの死体に刺さってるのを！」

どうやらアリサも弾切れに陥りそうになっているらしかった。

「アタシはアンタの犬じゃないのよっ！！」

沙耶は怒気混じりに言い放った。

「高城さん！こっちもマガジンが空になりそうです！」

「だからなんなのよっ！！アンタはすぐに詰め替えたらいいだけでしょ！」

沙耶は自分が顎で使われることが鼻持ちならず、憤りを顔を浮かべるだけで応えようとはしなかった。

「でも……いますよ……後ろに」

「え？」

沙耶の心臓の鼓動が速くなった。たまたま出現しただけなのか、それとも意図的なのか、眼を紅く充血させ、口や鼻から血を流す一体の教師らしき人物が、振り返るとそこにいたのだ。目と鼻の先の距離で、ルビー色の瞳を煌々と輝かせ、ゴボゴボと気泡音を立てている。

「きあああああああ！！！！」

沙耶は先程の口笛とは比にならない甲高い悲鳴を上げ、凍り付いた。この唐突な光景を前には、いつもは冷静沈着な沙耶も身動きが取れず、その場に座り込んでしまった。男はその悲鳴に呼応して、耳障りな奇声を発した。途端に血まみれの口内が姿を現し、歯が取れ落ちた。よほど空腹なのか、男は多量の唾液を口に含ませ、納豆のように粘つかせて血を混じらせた深紅の糸を引いていた。

「寄らないで……。お願いだから寄らないで……」

口をパクパクさせながら沙耶は懇願する。が、彼女もそんな言葉が《奴ら》に届くはずがないのは承知していた。しかし、あまりのショック状態に勝手に口が動いてしまう。そして、床に座り込みながら、ゆっくりと後ずさりする彼女の手元に、ザラザラとした感触が伝わった。「技術工作室」から持ち出してきた物を入れた袋だ。沙耶は懸命に冷静を保って考え、すぐに袋の中から電動ドリルを取り出した。

「来るなああっ！！」

沙耶の行動は的確で、素早かった。電動ドリルを持った右手を袋から引き出しざまスイッチを入れ、トリガーを引いて回転を続けるドリルの先端を渾身の力で男の額に突き立てて、そのまま脳に向かって押し込んでいった。

男は鈍い奇声を上げたが、それはすぐに、ドリルの先端から湧き立つ悍ましい喘鳴に掻き消された。赤と黒の吐瀉物がドリルの回転によって宙を舞い、沙耶の無垢な肌や清涼な制服に撒き散らされた。ドリルは肉を裂き、血管を裂き、脳に達した後、その振動と衝撃を

もってシェイクしたらしい。新鮮な血液と浸食されて腐った脳肉片が混ざり合い、ドリルによって噴水のように射出されたのだ。

「くそおつ！死ね死ね死ね死ねええつ！！！！」

電動ドリルの咆哮が続く中、6人の闖入者が現れたことに、沙耶は気付いていなかった。木刀が重厚な頭蓋を打ち砕き、ホッケースティックが《奴ら》の頭に鋭い刃物を突き差し、シヨベルの唸りとともに首が一本飛んでいたとしても、やはり彼女は気付かなかった。周囲の変化に気付いたのは、ドリルを突き立てた男が仰け反り、末期の声を上げて床に崩れ落ちた時。先を折ったモップが宙を舞い、金属バットが陽光を浴びて一閃した時だった。メタリック色の逆光を浴びて、《奴ら》の一人を容赦なく撲殺する「小室 孝」の姿が沙耶の視界が浮かび上がり、彼女は手を止めた。ドリルは男の額から引き抜かれ、虚しく空回りしていた。

「高城さんっ！」

孝と同行し、ここまで辿り着いていた「宮本 麗」は、モップ片手に沙耶の下へ駆け寄った。医師である静香も続いた。痙攣していた右手の自由が利き始めて、沙耶はようやく電動ドリルのスイッチを切った。

その一方、戦闘に従事していたコータとアリサは、突然やってきた来訪者達の下に居た。朔哉と今村の前に冴子が出て、何が起きたか完全に把握していない3人のサバイバー達と顔を見合わせた。

「鞠川校医は知っているな？私は毒島冴子。3年A組だ」

戸惑いを覚えつつ、後ろの朔哉と今村も自己紹介をした。

「小室孝。2年B組」

金属バットを手に持ち、孝は素気なく答えた。

「去年、全国大会で優勝された毒島先輩ですよね！私、槍術部の宮本麗です」

と、麗は目を輝かせながら元気に言った。

「……………如月 アリサ。2年A組」

アリサは淡々と言った。が、その瞳は熱を帯びていて、視線は兄である朔哉に向けられていた。

「あ、えと、び、B組の平野コータです。あ、2年です」

噛みながらも、コータは言い切った。アリサ同様、その視線は朔哉に向けられているが、彼の関心はその朔哉が持つ特殊なシヨベルに注がれている様だった。

「よろしく」

冴子の顔は微笑を湛えていた。コータはそんな冴子のギャップに鼻の下を伸ばしている様で、沙耶が見逃すことはなかった。

「なにさ。みんなデレデレして……………」

ふらふらになりながらも沙耶は立ち上がった。

「何言ってんだよ、高城」

「バカにしないでよ！私は天才なんだから！」

沙耶は怒鳴った。

「その気になったら誰にも負けないのよ！」

「もういい。十分だ」

冴子は静かに沙耶の肩に手を置いた。すると、彼女の顔から怒気の色が消え、不安と哀しみが露となった。彼女の視線は壁に掛かっていた鏡に向けられており、血に紅く染まった自身の姿を見て、うち震えていた。

「あ、ああ……ああ……こんなに汚しちゃった。ママにいつて、クリーニングに出さないと……」

沙耶は涙を堪えつつ、振り返ると、後ろに立っていた冴子の肩に抱き付いた。

「う……うつつ……」

目から大粒の涙が滲み出てきて、彼女の頬を流れ落ちた。

「ああ……ああああ……うわああーんっ！！」

沙耶は耐え切れず、床に崩れ落ちた。そして耐え切れずに大声で泣き叫ぶ。日常の崩壊　は、今の彼女にとって、あまりにも悲しすぎる現実だった。その心境は“絶望”の2文字に例えられるだろう。そんな沙耶の体を包み込み、冴子は彼女の顔に優しく笑みを

据えていた。

* * * * *

一連の騒動を経て、一同は職員室の中へと入った。すぐに出入口となる扉にバリケードを築き、《奴ら》の侵入を阻止する措置を取り終えると、それまで緊張と不安から息を殺すように呼吸していた一同は、新鮮な空気を腹一杯吸い込んで、それを大きく吐いた。

「皆、息が上がっている。少し休んでいこう」

その冴子が指す所は、正しかった。一同は椅子に座り、使いつ放しだった足を休ませる。

一方、高城 沙耶という大切な人を後、もう少しで失うところだったコータは、自責の念の駆られて沙耶の居る給湯室へ顔を出した。彼女はそこの洗面所で、自身の顔に付いた《奴ら》の血を水で洗い落としていたのだ。

「高城さん。大丈夫ですか？」

心配そうに伺うコータの声に振り向いた沙耶は、眼鏡を掛けていた。濡れた顔をタオルで拭うその姿は、コータの胸を打つ何かに満たされていた。

「あ。眼鏡……」

「だから何！？コンタクトがやたらとずれるのよ！」

先程の件もあるのか、沙耶はイライラしながらコータに言った。それは、コータが自分を守る役目を果たせなかったことよりも、自分自身の弱さの方が大きかった。あまりにもか弱い体は、あのメンバーの前では何の役にも立たないだろうし、あまりにも脆い心は他人に迷惑を掛けるだけだからだ。

「鞠川先生。車のキイは？」

麗からよく冷えたミネラルウォーターを手を受け取り、孝は訊いた。

「あ。バッグの中に……」

「全員を乗せられる車なのか？」

慌ててバッグの中に手をつ込み、弄る静香に冴子は根本的な質問を問う。彼女達、冴子・朔哉
今村の面々がここまでできたのはその為だ。

「うっ……。コペンです……」

冴子は首を振った。

「部活遠征用のマイクロバスはどうだ？壁のカギ掛けにキイがあるが……」

「まだあります」

コータは窓の外の駐車場に停められた2台のマイクロバスを指差した。

「バスはいいけど、どこに？」

静香は訊いた。

「家族の無事を確かめます。近い順に家を回るとかして、必要なら家族も助けて……。その後は、安全な場所を探して……」

「見つかるはずよ」

孝の言葉を遮り、沙耶は言った。

「警察や自衛隊だって動いてるはずだから。地震のときみたいに避難所とかが……」

沙耶は言葉を切り、職員室のテレビに視線を向ける麗を見据えた。

「どうしたの？」

麗は沙耶の問いに答えようとはせず、愕然とした顔でテレビ画面を見据え続けていた。

「なんなのよ、これ……」

「麗、どうした……!」

そんな麗の異様な様子に気づいたのか、孝がテレビに目を向けると、そこには信じられないことを告げるテレビポーターの姿が映

っていた。

『……です。各地で頻発するこの“暴動”に対し、政府は緊急対策の検討に……』

「“暴動”ってなんだよ“暴動”って！」

テレビに向けて、孝は罵声を浴びせ掛ける。

『本日正午未明、国会議事堂で“暴動”が発生した事を受けて、富浦内閣総理大臣は「非常事態宣言」の発令を検討していることを表明しましたが、与野党共に慎重論が強く……。与党内でも、「紫藤 一郎」内閣官房長官を急先鋒とするグループの圧力により……』

「紫藤っ……！？」

麗は憎悪の目をテレビ画面に映る、記者団に手を振る禿頭の老人に向けた。紫藤一郎と彼女とは、大きな因縁がある。彼女にとって、自衛隊を出動させずに《奴ら》の横暴を許す紫藤一郎の方策よりも、紫藤一郎自身の方が遥かに憎しみを抱ける対象であった。

「麗……」

孝は不安げな表情を浮かべ、彼女の肩を寄せる。が、彼女は怒りに満ちていた。

『富浦総理ほか、紫藤官房長官を始めとする一部閣僚は本日正午、自衛隊による救助作戦によって助け出されました。総理以下、救出者は政府専用機で脱出しました。繰り返します、総理以下、救出者は政府専用機で脱出しました。そして現在、都内での“暴動”は自

衛隊と警察によって鎮静化に向かっているとの情報も……』

「あんな奴……国会だろうがどこだろうが、死ねば良かったのよ……。死んで当然の人間だったのよ……」

「……………」

麗のそんな言葉に、一番胸を痛めたのは朔哉だった。おそらくだが、今回の救出作戦には自分の父親である「如月 修」第1師団長が関わっていることは間違いないだろう。如月 修と彼女の父親とは親交が深かったから、彼としてもこれは苦渋の決断だったに違いない。もし、作戦を意図的にでも遅らせていれば、紫藤一郎を含めた政治家達は死んでいたかもしれないからだ。

「紫藤一郎といえば、あの「紫藤 浩一」の父親よね？」

その光景を目の当たりにしていた沙耶は言った。

「ええ……そうよ……」

「官房長官といえば、内閣ではナンバー2の存在よ。もし総理が死ねば、政府機能が回復するまでの当面の間、あの男が政府の実権を担うことになるわ。そうなったら、自衛隊の支援も……」

沙耶は悲しげに言った。彼女が考えた、一縷の希望が失われつつあるのだから当然といえる。

『……………全米に広がったこの異常事態を收拾する見込みは立っていない』

気付けば、ニュースの話は日本から世界に拡大していた。

『合衆国政府首脳部はホワイトハウスを放棄。洋上の空母へ政府機能を移転させるとの発表がありました。なお、これは戦術核兵器使用に備えた措置であるとの観測も流れております』

世界最強の国の墮落。これが意味するものの大半は、誰もが理解した。

『……現在の時点で、モスクワとは通信途絶。北京は全市が炎上。ニューデリーでは臨国パキスタンへの難民流出が深刻化しています。イスラエルでは、聖地エルサレムを目指すアラブ難民の受け入れをイスラエル政府が拒んだことにより、中東諸国はエルサレム解放を承認しなければ、宣戦布告も辞さない構えを取っています。ロンドンは比較的治安が保たれていますが、パリ、ローマは略奪が横行……』

「世界は……どうなっちまったんだ？」

今村は呟いた。

『引き続きお伝えします。現在、各地で“暴動”が頻発しており』

「なんで“暴動”なんて言ってるんだよ？明らかにこれは……」

「パニックを恐れてるのよ」

沙耶は言った。

「いまさら?」

「いまさらだからこそ、よ!恐怖は混乱を生み出し、混乱は秩序の崩壊を招くわ。そして秩序が崩壊したら……どうやって動く死体に立ち向かえるの?」

「そんな……まさか……こんなこと説明が……」

「説明はつくわ。これは……パンデミックなのよ」

孝は首を傾げた。「パンデミック……?」

「感染爆発の事よ!世界中で同じ病気が大流行してるってこと」

「インフルエンザみたいなものか?」

よくイメージがつかなかったのか、孝はそう言った。

「1918年のスペイン風邪はまさしくそう。最近だと、鳥インフルエンザにその可能性があるといわれていたわ」

沙耶は更に続けた。「……インフルエンザをなめちゃいけないのは分かってるわよね?スペイン風邪なんか感染者が6億以上、死者は5000万になったんだから……」

「それより14世紀の黒死病に近いかも……」

「その時は、ヨーロッパの全人口の3分の1が死んだわ」

静香の意見に、沙耶は即座に情報を付け足した。

「……どうやって、病気の流行は終わったんだ？」

孝は訊いた。彼としては、それによってこの状況を打破出来るヒントのようなものが得られないかと期待していた。

「色々考えられるけど……人が死に過ぎると大抵は終わりよ……。感染すべき人がいなくなるから……」

「でも……死んだ奴はみんな……動いて襲ってくるよ」

コータは窓の外を見下ろして、言った。

「……拡大が止まる理由はないということか」

冴子は静かに言った。

「多分な。肉が腐るって可能性もないことはないだろうけど、あいつらに現代医学の知識が通用するとは思えないし……。ヘタすると……」

朔哉は言った。原作の受け売りだが、情報ストックがある分には使わない手はない。長々と話すと、時間を浪費するだけだし。

「では、家族の無事が確認した後、どこに逃げ込むかが重要な。ともかく、好き勝手に動いては生き残れまい……」

冴子は腕を組み、何かを考える仕草を見せた。

「……“チーム”だ。チームを組むのだ。生き残りを拾っていこ

う

「では、チームの役割を決めておくのも重要じゃないかな？」

朔哉は言った。

「役割ですか……具体的には？」

「RPGみたいに、単に“戦士”とか“魔法使い”で分けても良い」

「はいはい！じゃあ、僕は“ドラグーン竜騎兵”で！」

早速名乗りを挙げたのは、コータだった。やはり、ゲームが好きなのだろう。この朔哉の提案に対し、一番乗り気だった。

「じゃあ、コータはそれでいい。アリサは？」

「あ、如月さんは“アーチャー弓兵”でいいんじゃないかな？アーチェリーの「コンパウンドボウ」を持ってることだし」

と、コータは言ってアリサが組み立てを進めていたコンパウンドボウを見据えた。

「コンパウンドボウ？」

「うん。アーチェリーでは世界的に普及している弓だよ。日本じやオリンピックみたいな競技種目に使われるリカーブボウの方が主流だけどね。アメリカじゃ、猟用に使われているマイナーな弓なんだ」

不思議そうに訊ねた麗に、コータは説明した。

「しかも、如月さんが持つてるのは普通のコンパウンドボウじゃない。ホイット・プロバンテージシリーズ『RANBO』モデルだ。『怒りのアフガン』でランボーが実際に使用していたコンパウンドボウと同じモデルの弓なんだよ。まあ、ランボーは原作じゃ100ポンド級の力を持つてたらしいから、50 60ポンドのこの弓は力不足かもしれないけど。あと、懐中電灯が付いてるのは2作目の『怒りの脱出』で、『怒りのアフガン』じゃ青のケミカルライトステイックを使つてたから少し仕様は違うね」

と、コータはコンパウンドボウに備えられた懐中電灯を見て指摘する。

「分からないわ……アンタの言ってる事……」

沙耶は首を横に振りつつ、お手上げという様子で言った。

「じゃあ、アリサはそれでいいな？」

「……………うん」

アリサは小動物のように、こくりと頷いた。

「今村はどうする？」

「え、俺っすか？うーん……………そうですねえ……………。そう、“死神”っぽい……………ほら、なんか大きな鎌を持つてて、罪人が囚人を裁くよ……うな……………」

「エグゼキューション死刑執行人”……じゃないかな？」

コータの答えに、今村は思わず指をパチンと弾いた。

「そう、それぞれ！それだよ平野」

今村と平野は思わず笑みを漏らす。それは、この試みで朔哉が狙ったものの一つでもあった。

「宮本は？」

「え……あ、あたしは……」

「麗は“アマゾネス・アマゾン女戦士”ですよ、如月先輩」

戸惑う麗に代わって、孝が胸高らかに告げる。紫藤一郎の一件で暗い影を落としていた麗も、幾分かは気分も楽になっているようだ。

「では、私も宮本君と同じ役割を担わせて貰おう」

冴子が言った。

「じゃあ……っと。鞠川先生は“ヒーラー治療師”で、高城は……“ウイザード魔法使い”でいいかな？」

「ちょ……ちょっと待ちなさいよ！嫌よ、魔法使いなんて……」

朔哉の提案に静香は同意の頷きを返したが、沙耶は反対だったよ

うだ。

「じゃあ“^{セージ}賢者”はどうですか？」

「余計嫌よ！私は私、頭脳明晰容姿端麗な高城沙耶で十分なのよ」

沙耶が言い放って、提案者のコートを睨み付ける。長い白髭を生やした、皺だらけの老人でも想像したのだろうか。

「残るは俺と小室だな。俺は“^{バーサーカー}狂戦士”でいいや」

と、朔哉は軽快に言い放った。後でこれまでの事を含めて、何とも厨二病的なことをやっているな彼は思ったが、現実逃避でもしなければ《奴ら》と渡り合ってはいけないという結論に達した。現実逃避、いつても越えてはならない一定の線　すなわち“規定”を定めたことだが、《奴ら》は仮にも人間だった存在である。RP GやホラーFPSみたいに一体の“敵”として認識して戦わなければ、身も心も持たなくなると、彼は考えていた。

「じゃあ孝は？」

麗は言い、横を向いて孝の顔を見た。

「俺？俺は……」

「小室はもう決まってる　　^{プレイヤー}“勇者”だ」

そんな朔哉の言葉に、孝は瞠目した。

「ちょ……ちょっと待って下さいよ。俺が勇者ですか？」

「そうだ。で、このチームのリーダーを担ってもらう」

「リ、リーダーだなんて俺には向いてないですよ。先輩の方が……」

戸惑う孝に、朔哉は首を振った。

「いや、お前が一番適任だと思うんだ。リーダーになるっていうのは、単にリーダーシップの問題だけじゃないからな。それにこのメンバーの中では、一番勇気があるじゃないか。それこそ、勇者足り得るものを満たしている。みんなもそれでいいよな？」

そんな朔哉の問いに、今村以外の一同は快く頷いた。当の今村は渋々ながらも頷いていた。

「じゃあこれで決まりだな」

それまで沈黙を貫いて座っていた冴子は、静かに立ち上がった。

「チームと各々の役割は決まった。後はこの学園からの脱出を実行するだけだ」

「でも……どこから外へ？」

麗は訊ねた。

「……駐車場は正面玄関からが一番近い。まずはそこを目指そう」
勇者として指名された孝は、ミネラルウォーターのボトルを握り

締めて言った。

「なんだ、やはり君が一番“勇者”足り得ているではないか」

冴子はリーダーシップを発揮する孝を見て言った。

「いえ、俺は俺の役割に務めているだけです」

そんなぶっきらぼうな孝の言葉に、冴子はフツと笑みを零した。

「そうだ。小室、これを渡しておくよ」

そう言い、朔哉はボストンバッグの中から一丁の拳銃を取り出した。

「エアガンですか？」

「いや、実銃だ」

朔哉の言葉に、一同は凍り付いた。

「……コルトM1911A1。すごいな、本物だ……。45口径の大型自動拳銃……しかも、民生品じゃない真正正銘の軍用品……」

コータはM1911A1の重厚なガンメタリックボディを見て言った。

「なんでそんなものを？」

疑心暗鬼になりながら、孝は訊ねた。

「俺の一族は軍人一家なんだ。これは他界した祖父の形見みたいなものだよ」

「……明らかに違法なんじゃないですか？」

孝は訝しげそうに言った。

「ああ。だけどこの際、そんな事は言ってられない。それは覚悟してもらいたい」

朔哉の言葉に対し、孝は静かに頷いた。

「でも、俺は実銃を扱ったことなんて……」

「大丈夫だ。余裕があるのから、必要以上に使うことはない。《奴ら》を銃声で引き付けることになるからな。それに、弾も30発しかない」

朔哉は言った。

「あと、使い方はコータに教わってくれ。コータ、頼む」

「り……了解しました！」

本物のコルトガバメント 陸上自衛隊11・4mm拳銃に興奮しながら、コータは声高らかに返答した。コータは孝の下へ歩み寄り、一通りの射撃順序を口と動作で伝えた。

「分かったか？」

「はい。何とか……」

使い方は分かってても、それをいざ使うとなると話は別なようだ。

「じゃあ、行きましょう!」

M1911A1を腰元のポケットに突っ込んだ孝はその重みを噛み締めながら、一步を踏み出した。

S e t t i n g : G a n s o f t h e d e a d - P a r t : 1 (前書き)

今回は作中に登場した武器の紹介です。原作のものも引用しておりますので、悪しからず。

Setting: Guns of the dead - Part: 1

『COLD - STEEL スペシャルフォースシヨベル』

説明:

如月朔哉・私物。

全長800mm×重量780g前後。炭素鋼製。

ハンドルはハード・ウッド製。破壊力・優、切断力・最優。コールドスチール社製。旧ソ連の特殊部隊『スペツナズ』装備の軍用シヨベルをベースにハードユースに耐える様、更に改良したモデル。

解説:

いわゆる『武器としての刃物』を多数製造しているコールドスチール社が開発したものです。スコップにのような取っ手がないのが特徴的で、そこはヨーロッパの伝統に則ったための仕様です。本来の製品モデルは500mmで、スペツナズらしい野外戦型多用途携行武器となっていますが、今作では更にハンドル部分を長くして『奴ら』との間合いを取ることを優先しています。シヨベルに使われている複合炭素鋼は非常に硬質で、エッジには荒いですが刃がついています。この特性を踏まえて、通常は刃を用いた斬撃。大勢の敵に囲まれた場合は打撃が主な攻撃手段です。

また、このシヨベルは『投げナイフ』の要領で相手に投げる芸当も可能ですが、流石は投げナイフの名家、スペツナズのものをベースにただけあります。(スペツナズでは投身だけを射出する『発射ナイフ』なるものがあり、またナイフを素手で投げる技術の高さでも有名です)主人公もまたスペツナズばりに投げます。

ハンドルに使われているハードウッドは「100年腐らない」と言われる木材で、打撃武器としても大いに活躍が期待出来ます。

『朔哉／木刀』

説明：

如月朔哉・私物。

赤樫製。全長115cm×推定重量1Kg前後。

素振り用櫓型木刀でその重量から『殺人木刀』の異名を持つ。

解説：

朔哉が小学6年生の頃から絶やさず使用している素振り用木刀です。重量1Kg前後ということでかなりの力が要求されますが、彼はそれよりも幼い頃から『如月流円匙護剣術』と自衛官の父親から学んだ剣術によって鍛えられていましたので、他愛もなく戦闘にも使用出来ます。

この重い木刀を使って朔哉は、毎日平均100回を目途にした素振り練習を欠かさず続けてきました。が、上には上がいるようで、新撰組の局長として知られる「近藤 勇」は4貫（約15Kg）の木刀で毎日素振りを100回していたそうです。しかも“全裸で”ということなので、全くもってとんでもないです。とんでもない変態です（笑）

『冴子／木刀』

説明：

毒島冴子・私物。

白樫製。全長101.5cm×推定重量700g前後。

一般に赤樫製より重くて堅い。流派によっても形状が違う。

解説：

原作によると、大和朝廷と大和民族の謎を全て解き明かす秘密が封印されている木刀……らしいです。とにもかくにも、一ついえることは、この木刀が毒島冴子の卓越した技術で《奴ら》の頭をかち割り続けることだけです。

『金属バット』

説明：

野球部員の私物を無断借用。

合金製。全長84cm×重量900g以上（野球規則による）

孝が使用。破壊力・優。

解説：

主に日本のゾンビ物で光る武器の一つです。野球が普及している国の海外作品では銃社会が確立されていたり、更に過激でユニークな武器を登場させたりするので、こういったバットの類が主役の武器になることはあまりありません。

『モップの柄』

説明：

普通の校舎内掃除用床ホウキの先端を外したモノ。

アルミ製。推定全長120cm前後。

解説：

振り下ろすよりも突くのに向いた、リーチの長い武器です。使用者に近寄ろうとする《奴ら》を寄せ付けず、且つ、強力な一撃を安全に繰り出すことが可能です。

『ホッケースティック／肉切り包丁付き』

説明：

アイスホッケー同好会及び家庭科調理室・備品。カスタム武器。
ホッケースティック：カーボン製／肉切り包丁：ステンレス製。
全長121cm前後（ホッケースティック：95cm前後／肉切り包丁：33.5cm）

打撃・切断能力に特化した万能武器。肉切り包丁は要取り替え。

解説：

原作死亡組、今村が使用するカスタム武器です。通常のホッケースティックの先端部分にガムテープで肉切り包丁を取り付けたもので、そのリーチはメンバー内の近接武器の中では最長です。ただ、肉切り包丁はガムテープで固定されているために取れやすく、ガムテープで補強したり別の包丁を付け直したりする動作が必要となりますので、外れた場合は打撃武器として使用します。その形状が『大鎌』に似ていることから、今村の役割名“エグゼキューションナー死刑執行人”の由来にもなっています。

『電動ドリル』

説明：

技術工作室・備品。打撃切替機能付き。金属も貫く。
全長316mm×高さ206mm×重量4.35Kg（電池パック含む）

解説：

木ネジの締め付け、穴あけに威力を発揮する電動工具。某ロボットのアニメでは、巨大なドリルが天を突きます。

『BARNETT スリングショット』

説明：

如月アリサ・私物。

全長40cm前後。重さ500g。強化プラスチック製。バーネット社製。

解説：

原作でも登場する『バーネット・ワイルドキャットC5』を製造することで知られるイギリスの有名なクロスボウメーカー、バーネット社が販売するスリングショットです。照準器付きで元から優れた性能を誇るものでしたが、ゴムを替えるなどアリサの手によって若干の改造が施されています。その威力はスチール缶を貫通するほどで、作中にアリサが製作した「ミセリコルデ弾」であれば、『奴ら』の頭を簡単に破壊することが可能です。石や木の実といった、自然のものまで弾として利用出来る為、今後も活躍が期待されます。

『HOYT - USA コンパウンドボウ』

説明：

如月アリサ・私物。

強度60ポンド。重量2.1Kg。ホイット社製。

市販のプロバンテージシリーズをベースに開発された『RANBO』モデル。

コンパウンドボウは、アメリカでは主流ですが日本ではあまり使われていないタイプです。弓道部で使われている『和弓』や、日本で一般的なアーチェリー弓として知られる『リカーブボウ』と異なる最大の特徴は、コンパウンドボウが『機械弓』であるということです。コンパウンドボウはリムの部分に偏心滑車を備えていて、そこから弦を張ることで、ドロ잉ング中（弓を引いている途中）に最大ウェイトがくるようになっており、フルドロー時には表示されているポンド数の半分から30%まで引きが良くなります。よってエイミング中（的を狙っている途中）の負担が軽減され、精度の高いエイミングが可能なのです。また、リリーサーという道具でリリース（矢の発射）を行うため、機械的に安定しており、他の弓よりも命中精度が格段に向上します。練習さえすれば、30m以内なら人間の目を射抜くことも容易な筈です（但し、静止物体に限る）。アリサは普段、アーチェリー部では日本で主流のリカーブボウを使用していますが、コンパウンドボウにも精通しています。

このアリサが使うホイット社製のコンパウンドボウは『RANBO』モデルと呼ばれ、映画『ランボー3/怒りのアフガン』でシルベスター・スタローン演じるランボーが使ったのと同様のモデルです。超人ランボーはこのコンパウンドボウと爆弾付きの矢で敵をバツバツと殺し、拳句の果てにはヘリコプターを撃墜しています。元はアリサの父親のもので、アメリカへの帰省中にランボーフリークだった父親が思わず衝動買いし、日本に持ち込んだという経緯がありました。今作では、その数少ない遺品として如月家に置かれていたものを、朔哉が持ち帰ってきたことになっています。

『釘打機』

説明：

技術工作室・備品。

全長317mm×高さ403mm×重量3.9Kg

解説：

ガス式釘打ち機をベースに改造を加えたネイルガン。本体内燃焼室でガスを爆発させ、その力で釘を打ち込みます。作中ではバンバン釘を撃っていますが、実際には備え付けられている安全装置の關係上でそうもいかないようですので、ご都合主義的な武器と言えます。

『M1911A1 コルト・ガバメント』

説明：

如月朔哉・私物。孝が使用。

全長216mm。口径45×7発。アメリカ製。

米陸軍の日本向け貸与品。陸上自衛隊名称『11.4mm拳銃』

解説：

「大口径主義アメリカ」を髣髴させる大型自動拳銃。45口径の大口径は魅力的で、終戦後は米陸軍から陸上自衛隊や警察への制式採用が進められました。が、小柄な日本人には不向きな拳銃でした。威力は文句ナシに強力ですが、その分大きな反動が大きくて扱い難い点もあります。元は如月朔哉の祖父のものです。が、どさくさに紛れて朔哉が回収し、これまで隠していました。

部活遠征用のマイクロバスが停められている駐車場は、正面玄関の先にあった。だが、そこには《奴ら》がせわしげに行き交い、黒ずんだ吐瀉物や血を吐き出しながら徘徊している。理由はさしずめ、学園から逃げ出そうと試みた生徒達が居たからだろう。その結果残念ながら、この正面玄関と駐車場を結ぶ道は《奴ら》の密度が高い一画となってしまった。

「どうする？」

ホッケースティックを掲げ、ブレード先端部に取り付けていた肉切り包丁を取り外しながら、「今村」は「小室 孝」に訊ねた。その背後にはタオルを首に掛け、金属バットを握り締める「卓造」という名の生徒がおり、その背後に不安げな表情を浮かべる4人の男女生徒の姿があった。卓造は先程、校内の階段踊り場で《奴ら》に囲まれていた所を孝一行に助けられた一団の1人で、リーダー的存在であったが、やはり不安と緊張は隠せない様子だった。歯をしきりに鳴らして、体が小刻みに揺れている。

「集団で、しかも屋内にいるのは危険過ぎる。ぐすぐすしてたら《奴ら》が集まってくる」

と、彼は言いつつ、正面玄関の出入口を覗いた。校内からマイクロバスまでの最短ルートを繋ぐその通用口には、《奴ら》の姿が目についた。それも大量に。おそらく20体……不確定要素を含めれば、それ以上の存在が確認される。単独ならともかく、10名以上

の生命を預かっているこのうら若きリーダーは、石橋を叩いて渡るといふ具合の慎重さで事に当たっていた。

「見えてないから隠れることなんてないのに……」

「じゃあ高城が証明してくれよ」

「うつ……」

それまで苛立ちを吐き出していた「高城 沙耶」の口から、急に不安そうな響きが滲み出た。大局的に状況を把握し、助言してきた参謀が上官から、一兵卒のように敵陣に突撃しろと言われているようなものだ。それに沙耶自身もそう考えていたが、《奴ら》が視覚能力を欠如していて聴覚に頼っているという推測は、あくまでも仮説だった。熱等の例外もあるかもしれないし、視神経がかるうじて生きているという変異体がいなくても言い切れないのだ。

「しかし、このまま校舎の中を進み続けても襲われた時に身動きが取れない」

「毒島 冴子」は眉を顰めた。

「玄関を突き抜けるしかないのね」

「誰かが……確かめるしかあるまい」

その言葉が響いた後、一瞬の静寂が周囲を支配した。人が、大気が、そして時間が凍結したかのような静寂。だが、それでは地獄のようなこの学園から脱出出来ないことを誰もが理解していた。

「……俺が行く」

そう言ったのは、転生者である「如月 朔哉」だった。彼はこの場面の後、何人かの生徒が死ぬことを知っていた。それを阻止するためにも、そして「恐怖」との決別のためにもと志願したのだった。

「大丈夫か、朔哉？」

冴子が心配そうに声を掛けてきた。

「ああ、これまでのところはな。それに多分、これからも」

朔哉は微笑した。

「とにかく、ここで待っていてくれ。ちょっと散歩がてらに行ってくるから」

それから下駄箱裏から朔哉は身を乗り出した。ちらりと玄関内を覗き込むと、複数の《奴ら》が呻き声を発しながら徘徊していた。「歩く死体」に目が慣れたのだろうか、いまや朔哉が《奴ら》の大量から感じ取る恐怖の源は視覚よりは、嗅覚や触覚からひしひしと伝わってきていた。玄関の奥から流れてくる外気はやけに冷たく感じられ、その冷たい空気にはアンモニアのような刺激臭が混じっている。

だが、同時に “光” もある。琥珀色の陽光がガラス張りの玄関扉から差し込んでいたのである。ただ、その前には異臭に満ちた“闇”が溢れているのだが……。

《奴ら》の動きは《奴ら》自身がそうしているように、目だけではなく音でも分かった。《奴ら》の一挙一動、ブラブラと垂れ下がる腕が空気を切り裂く音や靴の擦れる音が、微かな訝を呼んでいる

のだ。だが、壁や床に反響するその音々に、《奴ら》は振り回されている様子はない。不思議なものだな……と朔哉は思った。やはり仲間同士の識別手段でもあるのだろうか。いやそれとも、もしかしたらその反響する全ての音に反応して行動した結果が、あのいわゆる平衡感覚を失ったかのような“拳動不審”な動きに反映されているのだろうか？

とりあえずはその推論を吐き捨てて、朔哉は床に落ちていた一足の靴を手にとった。そしてそれを近くのロッカーに向けて投げる。数秒後、弧を描いて宙を舞い、落下した靴が、鈍い金属音を放った。それからすぐに、それは地面に落ちて音を立てた。玄関内にこの音がひどく反響したのは間違いない。呻き声を上げ、徘徊していた《奴ら》はその音源へと群った。

どうにか足音を立てずに玄関扉へと到達し、出来るだけ静かに扉を開けた朔哉は、小さく手招きした。ここまでは順調。冴子が先発し、扉をくぐり抜ける。次に孝、麗、コータ、アリサが続く。やはり全ては順調に進んでいた。朔哉としては満足だった。実はこの行動を起こす以前に、サスマタを持っていた男子生徒からその武器を放棄するように言っておいたのだ。その男子生徒は渋々ながらもそれに同意した。

原作でもアニメでもそうだが、そのせいで何人もの犠牲者が出た。創作上の世界ではただの演出に過ぎないだろうが、これは“現実”である。話を盛り上げるための都合のために人が死ぬことなど許されない、朔哉は考えていた。

（これで原作ブレイクを　　）

…… カアアアーンツ！！

「ッ！？」

唐突な、冷徹な甲高い金属音が響いた時、朔哉は自分の口から驚きの声が漏れ出すのを聞いた。と、同時に、朔哉の心臓はにわかに早鐘を打ち始めた。

「そんな馬鹿なッ!!」

思わず叫んでいた朔哉の視界に《奴ら》の姿が映った。表面が砂や埃によって摩耗し、白濁した眼。血塗れの歯を剥き出しにして、歪んだ笑みを含んでいるような口。それは感染者に侵入した“何者”かが脳を破壊し、顔面筋を不随意に収縮させてしまったための現象だった。だが、朔哉にはまるで《奴ら》がこの一連の行動を嘲笑しているかのように見えた。そんな口はいまや“餌”を欲して血と涎を垂らしている。

朔哉は不意に、シヨベルの切っ先を振り上げ。

「走れ!!」

と叫ぶ孝の声を聞き、シヨベルの切っ先を下ろした。

* * * * *

- # 10 -

:「Spring of the dead - Part : 6」

朔哉は手元から視線を上げ、素潜りでもするかのように大きく息を吸い込んだ。そしてぎゅっと目を閉じ、くると身を翻して玄関扉をくぐり抜けた。そこで閉じた目を見開く。薄肌色を含んだ漆黒の闇がゆっくりと晴れて、代わりにうらかな春の陽光が広がってゆく。

「なんで声出したのよっ！」

沙耶の甲高い声が玄関前に響き渡る。

「黙っていれば手近な奴だけ倒してやり過ごせたかもしれないのにつ！」

「あんなに音が響くんだもの、無理よ！」

悲痛を飲み込んだ肉体を奮い立たせ、闘いに身を投じる少女「宮本麗」は言った。突き出されたモップの柄は眼球に押し込まれ、脳を貫く。桜の花弁で満たされた校舎玄関前にどす黒い血が舞った。地面に倒れた死体から柄を引き抜いた麗は、再び接近する敵に対して、容赦ない攻撃を与えるのだった。

「そうだ、過ぎたことを言っでどうする。今は目の前のことに集中しろっ！」

紫色の閃光が沙耶の目前を擦過し、一体の人間とおぼしき姿が宙を舞った。そしてその先には、光に照らされた死体の山を背に、いつもと変わらぬ目をした冴子の姿があった。

「でも……」

「話すより走れッ!!」

そう言った孝の視線の先には、駐車されたマイクロバスの車影があった。

「あ……ああ……」

しかしその道には、《奴ら》の姿もあった。複数の灰色の腕が伸びてきて、孝を捕食しようと躍起になっている。

「あああ……」

その内の一体が頭上から降りかかるかのように大きく腕を広げ、捕まえに掛かろうとした所で、孝の反射神経はついに警鐘を鳴らしたようだった。不意に発した呻き声に孝は、咄嗟に腰のコルトM1911A1を抜いていた。

「これでもくらえ」

ヒューーンッ！！

大気を貫き、10m先から放たれた一本の矢は、孝に襲い掛かるうとしていた奴の頭を撃ち抜いた。グラスファイバー製のコンパウンドボウ・アローが頭蓋を突き抜け、その傷口からどくどくと血が流れ出る音を孝は聞き入った。

拳銃を腰にしまい込む暇もなく、彼の前には見知った人の姿が現れていた。「如月 アリサ」。2年A組の生徒にして、如月朔哉の義妹でもある彼女の無表情が、そこにはあった。

「……大丈夫？」

小さくも澄んだ声が、孝の耳に響いた。

「あ……ああ……ありがとう」

コルトM1911A1を腰にしまい込みながら、孝は言った。

「ぎゃあああああつ！！」

突然響き渡った悲鳴に、孝は瞠目した。悲鳴の先には、首に夕オ
ルを掛けて金属バットで勇戦していた卓造が、《奴ら》に貪り喰わ
れている光景があった。そしてその絶望的な光景を見ながらも、そ
れを追って一人の女子生徒が走ってゆく。

「……急ごう」

よろけた体を支えて、孝は目を背けた。許せない光景だった。誰
にも救われることもなく死んでゆく卓造と、アリサによって救われ、
ぬけぬけと生きている自分。校舎でお節介にも救っておきながら、
最後は自己責任で行動させ、死なせてしまったのだ。まるで
“捨て駒”のように。

マイクロバスへはそれから1分と経たない内に到着した。後ろか
らは、静香先生を中心に生き残ったメンバー達が駆け寄ってくる。

「逃げ！逃げっ！」

孝は金属バットを振り上げ、迫り来る《奴ら》に追い立てられな
がらマイクロバスを指すメンバー達を急かした。近接武器だし、
《奴ら》の数も多いから前に出る訳にもいかない。孝はそんな状況
での自分の役割に不満を抱きながら、とにかく叫んだ。

「窓から撃つよ！」

「よし、如月もバスからの援護頼む！」

孝が適確に指示を出し、脱出の最終段階は円滑に進み始めた。朔哉と冴子の2人がバス前で殿を務め、コータとアリサがそれぞれ射撃援護を務める。この二重の防衛線に加え、朔哉は“切り札”を使った。

「これでもくらえっ!!」

朔哉は腰のポケットから防犯ブザーを抜き取り、黒色のピン普拉グを引き抜いた。と次の瞬間、130デシベルの大騒音がマイクロバスの前で鳴り響き、大気を揺るがした。その騒音を聞いた《奴ら》はまるで感電したかのように踊り狂い、どこを向いているかよく分からない視線はその音源に釘付けになった。

そして防犯ブザーを握り締めていた朔哉の右手は天高く掲げられ、振動と轟音を響き渡らせながら宙を舞った。かなりの飛距離を記録した防犯ブザーは校舎玄関前近くに着地し、なおも甲高い騒音を響かせていた。

「よし、《奴ら》が引き寄せられていくぞ」

孝は歓喜した。

「待て。まだこちらに来る者もいるぞ」

そう言った冴子の視線の先には、マイクロバスが放つエンジンの重低音に惹かれ、群ってくる《奴ら》の姿があった。

「……くれえっ!!」

そして、かつて鳴り響いていた元の音源を目標に群る者もいた。それは《奴ら》ではなく、真正正銘の生きている人間だった。眼鏡

を掛けたスーツ姿の男を筆頭に、数名の生徒達が続く。

「誰だ？」

「3年A組の紫藤だな」

孝の呟きに、冴子は答えた。

「もう出せるわよっ！！」

前方から迫る《奴ら》に焦ったのか、静香は急ぎ口調で言った。

「どうする？勇者さんッ！」

朔哉は迫り来る《奴ら》の一体を殴り倒しながら、孝に訊いた。

「それは待つに決まってるじゃないですか！僕達が助け」

「あんな奴、助けることはないわっ！！」

麗は叫んだ。怒りの色に満ち満ちているその表情には、苦悶と恐怖も滲み出ている。

「麗！！なんだってんだよっ！！」

「助けなくていい！あんな奴、死んじやえばいいのよっ！！」

孝と麗が口論を続けている中、「紫藤 浩一」は足首を挫いたという男子生徒の顔面を蹴り飛ばしていた。目が裂け、血で視界が真っ赤に染まった男子生徒は甲高い悲鳴を上げて、《奴ら》を誘う恰

好の標的に仕立て上げられていた。

（フフフツ……）

そして、その血塗られた靴底をバスの床へと踏み込んだ紫藤は、歓喜の声を胸の内で呟いた。

「静香先生！！行きます！！」

孝の声とともに、バスのアクセルは踏み締められた。

「もう人間じゃない……もう、人間じゃないっ！！」

アクセル全開で猛進するマイクロバスは次々と《奴ら》を轢き殺し、吹き飛ばしながら校門めがけて突っ込んだ。閉ざされていた校門は吹き飛ばされ、バスは勢いよく外に飛び出した。

学園からの脱出。この危機的状況からの一時的な回避に、紫藤に率いられていた生徒達、孝達によって助けられた生徒達はこのことに大きく喜んでいるようだった。また、これから複数の苦難や困難が待ち受けているであろうことを知っている孝達も、一時の休息と“学園”からの脱出に、内心胸を撫で下ろしていた。

しかし、全ては 脱出はまだ、始まったばかりだった。

#10: Spring of the dead - Part: 6 (後書き)

とりあえず6話に渡る『学園脱出編』はこれで終了です。原作の引用ばかりですみません。オリジナルストーリーの突入は原作でいうところの第4巻を予定しております。

そして最後に、これからもよろしくお願いします。

11 : Wild of the dead - Part : 1

もはや未練も愛着もない藤美学園の脱出を果たし、束の間、地獄から目を背けることが出来たマイクロバスの生存者達だったが、その自由を感じられる時間は長く続かなかった。坂の上に築かれた藤美学園からは、床主の街が一望出来たのだ。それも地獄絵図のような街が。

「街が……燃えてやがる」

バスの車窓に顔をくっ付け、「今村」は愕然として呟いた。床主市の各所から火の手が上がり、その空は黒煙と熱によって褐色に染められている。そしてそんな空にはヘリ、飛行機、はては商業用の飛行船が飛び交い、太平洋に向かって飛んでいた。

「静香先生、運転には気を付けて下さい。道路は《奴ら》と車で溢れてますから」

「小室 孝」はそう言いながら、再びマイクロバスが走行する道の先を覗う。ガードレールや対向車に衝突してボロボロになった普通乗用車が数台、横転して炎上する大型トラックが一台。そして、肉を貪り喰う《奴ら》の姿があった。捻れたり、人体欠損しながらもゆらゆらと揺れ、平然と佇む《奴ら》。両手を前に突き出し、何かを求めて彷徨い歩く《奴ら》。打ち棄てられた車や家々の中からマイクロバスの走行音を聞きつけ、必死になって這い出てくる《奴ら》……。

地面の所々にはもはや、人間と呼べない肉の塊や引き千切られた

臓物、さらには四肢の一部が赤い血を滴らせながら飛散していた。孝は車窓から顔を背け、息を整えるため手すりに手を伸ばしたが、その指先はブルブルと震えていた。

これはゲームじゃない。“現実”なんだ。

“現実”から目を背けた行動に反して浮かび上がってきたその言葉が、全身の神経を硬直させてゆく。不揃いに鼓動を打つ心臓、涙を流すかのように潤む目、込み上げてくる吐き気。気管が破けてしまったかのように、いくら空気を吸っても肺に酸素を送り届けられない。震えの止まらない手を握り締めて、孝の体はそれまで座っていた座席の前で完全に静止してしまった。

* * * * *

- # 1 1 -

:「Wild of the dead-Part:1」

「ふう……助かりました。リーダーは毒島さんですか？」

「いや、我々のリーダーは……」

3年A組の担任、「紫藤 浩一」に不意に声を掛けられた「毒島 冴子」は、自分の座席の前でぐったりとこうべを垂れている孝の方を振り返った。

「小室君……。我々のリーダーは小室孝だ」

そう言い、紫藤を見返した冴子の瞳には絶大の信頼が含まれてい

た。

「……ほう」

紫藤は怪訝な視線を孝に向け、呆気に取られたかのような声を漏らした。

「それは……いけませんねえ」

「何故だ？」

立ち上がった朔哉の顔に、憤慨の陰りがあつた。彼は今後の展開を円滑に進めるため、そして紫藤のような奴にこのバスを仕切らせないために、孝を早期に“リーダー”として決めたのだ。その尽力を一瞬にして灰塵に帰すような紫藤の言葉は朔哉にとって、許せるものではなかった。

「まさか“生徒”にこの十数名余りの人間を支えるような重圧を課す訳にはいかないでしょう。リーダーというのは、重い責任に耐えられるだけの力量と経験を備えていなければ……」

「つまり？」

「つまり。ここは“大人”であり“教師”たる者がリーダーになるべきだと、私は思うのですよ。そして同時に、優れた統率力と経歴……失礼、経験を備えた者がね」

紫藤は微笑を口許に湛えた。

「たかが“教師”に何が出来ると言うんです？」

反抗的な態度を露わにして、朔哉は言った。

「それはそれは……如月君、全くその言葉は心外ですねえ……」

「紫藤先生、答えてくださいよ。あんたに何が出来るか。小室や俺のように、あの外で暴れ回る《奴ら》に対処できる能力を備えているんですか？それとも、鞠川先生のように病氣や怪我を治せるんですか？」

「……………」

「あんたにできることは、何かを企むことだけだ。でもそんな奴、ここには要らない」

そう言うと、朔哉は口を閉じて紫藤を見据えた。当の紫藤の顔には、焦りと不安と憎悪の色が浮かんでいる。場の空気を乱され、痛い所を突いたな如月。だが残念、私には“切り札”がある。

「では、“多数決”といきましょう。ここは日本、民主主義国家ですからね」

それまでとは打って変わって見せた満面の笑みを、紫藤は振り撒きながら言った。

「そして皆さんのために、一分間の自己アピールとでもいきましょうか……小室君からどうぞ」

そんな紫藤の音頭に、孝が答えることはなかった。一分間の沈黙の後、腕時計から視線を上げた紫藤は不敵な笑みを浮かべて小さく

拍手をした。

「言葉は語らず……ですか。ああ、まさに小室君らしい。それも個性ですよ、皆さん」

紫藤は言い、眼鏡をずり上げた。

「藤美学園の皆さん、私は紫藤浩一と言います。知つての通り、私は3年A組の担任を務めておりました。おそらく皆さんを統率し、安全と秩序を守らせることができるでしょう。それに皆さんには黙っていました、私の父はあの「紫藤 一郎」です。国会議員で、内閣官房長官を務めています。私はその優れた人脈を活かし、皆さんを救い出すことを約束しましょう……」

と紫藤は言うものの、彼自身としては父親の名を利用するのは本懐ではなかった。紫藤一郎は彼にとって、《奴ら》にも劣らぬ憎悪の対象、人間の屑の中の屑だった。

「小室君に賛成の人は？」

朔哉はすぐに手を上げ、周りを見渡した。冴子、麗、アリサ、コータ、沙耶、今村の6人が手を上げた。しかし紫藤に助けられた生徒はともかく、孝に助けられた生徒達まで紫藤側に付いたというのは、朔哉にとって的中して欲しくない予想であった。

「では……私に賛成の人は？」

その紫藤の声を待ち侘びていたかのように、生徒達の手が一斉に伸び上がった。

「……という訳で、私がリーダーになりました」

紫藤はしたり顔を浮かべ、ピンと人差し指を立てた。

「今後のことについて話し」

「……冗談じゃねえ」

それまで自分の座席に座っていた今村は立ち上がり、紫藤を睨む。

「冗談じゃねえよ……！ここまで来てまだ先公面でしゃしゃり出てよお。もううんざりなんだよ、紫藤って奴は！」

紫藤は蔑むような目を向けたが、口から漏れた声はいかにも優しいなものだった。

「それでも私は君を助けますよ。私は君を助ける義務がある。だから、君も私を信用し、従って頂きたい。そう……“君は私を必要としているのです”」

そして紫藤は手を差し伸べた。まるで青春ドラマか何かのような調子で。その顔には、苦痛も不安も全て洗い流してくれるような微笑が湛えられていた。

「紫藤先生……」

今村は手を伸ばした。その瞬間、紫藤は不敵な笑みを浮かべる。

「バカだな。俺がアンタに懐くとしても本気で思ってたのか？」

そう言い、今村は手を引いた。

「今村君、君は分かってる筈だ。君は私が居ないとダメだって」

「あんたに何が出来ると言うんだよ。言葉と体罰で生徒を責めるしか能がないんだろ？」

眉間に皺を寄せた今村は、同じような表情を浮かべる紫藤を睨んで言った。彼はもううんざりだった。紫藤に自分の行動を制限されることを。折角タイプの女が近くにいて、折角学園から脱出出来て、折角つまらない日常に終わりを告げられたというのに、この男はそれをまた戻そうとしているのだ。しかも、自分好みに。

「おい、てめえっ！」

孝達が半ば呆然と二人の口論を見ていると、背後からぶつきらばうな声が響いた。その声を発したのは、金髪に染めた髪を跳ね上げた男子生徒、「角田」だった。根っからの不良という風貌の彼は、紫藤側の人間だった。

「紫藤さんが決めたことに盾ついてんじゃねえよ！」

「んだとっ！テメエは関係ねえだろうが。黙ってる！」

敵意の目を剥き出し、わめき散らす二人。紫藤は腕を組み、不敵な笑みを浮かべてその光景を傍観している。そんな光景を見兼ねたのか、孝は立ち上がった。

「二人とも何やってんだ。喧嘩してる場合じゃないだろ」

その言葉に、角田は攻撃の矛を孝に向けた。

「なんだよお前、エラそうにしゃがって。そういう所が気にいらねえんだよ!!」

「ああ？何が気にいらねえって言うんだよ？」

「てめえっ！」

角田が言い返した瞬間、彼の脇腹を一筋の電撃が迸った。角田が視線を下ろすと、宮本麗がモップの柄で自身の脇腹を突く光景が映った。

「あッ！あぁッ……！ゲホッ……うぐッ」

角田は悶絶し、床に転がり落ちた。口から白濁した吐瀉物を撒き散らし、激しく咳込みながら、アルマジロのように丸まっている。

「……最低」

麗は床で悶絶する角田の醜態を見て、吐き捨てるように言った。

「れ……麗」

その光景を呆然と見ていた孝は、静かに彼女の元へと歩み寄った。

「……孝」

誰も、何も信じられない世界での唯一の“希望”。孝はモップの柄を抱え、不安と恐怖を必死に押し殺している麗の顔を見て思った。

そう、僕はそれがあれば、生きていける。

「……素晴らしい」

満面の笑みを浮かべ、賞賛の言葉と拍手を紫藤は二人に送った。

「しかし残念でもありますね。宮本さん。暴力じゃ、何も解決できない」

やれやれと首を振り、紫藤は呆れ顔を浮かべた。その仕草が逆鱗に触れたのか、麗はキツと紫藤の顔を睨み付け、わなわなと怒りで身を震わせながら、バスから飛び出した。

「麗！？」

彼女の異変に最初に気付いた孝は叫んだ。

「行動を共に出来ないというのであれば、仕方ありませんね」

紫藤は困惑の表情を繕いつつ、自分の楽園から不穏分子が排除されたことに内心、喜びを隠せずにいた。

「何言ってんだ、あんた……！」

孝は紫藤を睨み付け、バスから飛び出して麗の後を追う。

「街までだ！街まで我慢するだけじゃないか！それに歩きじゃ危険……」

「だから後悔するって言ったのよっ！！」

麗の甲高い声が大気を震わせる。いまや噴火した火山のごとくこれまでの憤怒を爆発させる麗を動かさない瞳で受け止めて、孝はその場に踏み止まった。

「ともかく今は!!」

プワァンッ!!

甲高いクラクションが鳴り響いたかと思うと、孝の視界には一台の大型観光バスの姿が映り込んだ。猛スピードでこちらに迫るそれは、止まる気配が全くなかった。

「くそッ！これじゃあ原作通りじゃねえかッ！」

マイクロバスの中で、朔哉は叫んだ。と同時に、大型バスは一台の打ち棄てられた乗用車に激突し、横転する。車体はアスファルトを猛然と滑り、火花が飛び散ったかと思うとその大型バスは爆発した。

「小室ッ！大丈夫か！」

朔哉はバスから飛び出し、叫んだ。

「先輩！」

孝の声が聞こえるが、自分の目の前には、彼の姿はない。あるのは炎と、その炎に焼かれて火達磨になりながら迫り来る《奴ら》の

姿だった。

「警察で……東署で落ち合いましたー!!」

炎の中から孝の声が響き渡る。

「時間は？」

「午後5時に！今日が無理なら、明日の時間で！」

その孝の言葉を聞いた朔哉は、静かにバスの扉を閉めた。

「静香先生、出してくださいっ！ここはもう進めません！」

「分かったわ！戻って他の道を！」

マイクロバスはそろそろとバックし、Uターンして街に向かう新たな道を辿ってゆく。

朔哉は炎に燃え上がるトンネルを見据えつつ、唇を噛み締めた。

「くそっ……!!」

朔哉が呪詛の言葉を吐く中、トンネルは燃え続けていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5546x/>

学園黙示録 -Antithese[アンチテーゼ]-

2011年11月23日21時58分発行